

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造

—— 埼玉県的事例を対象として ——

青 木 弘

要旨 古墳築造技術研究の観点から埼玉県の横穴式石室について、基礎構造と裏込構造を中心に分析を行った。

古墳構造のなかで基礎構造は横穴式石室の下部を支持し、裏込構造は横穴式石室の背後を支持する。この基礎構造を掘込の有無に応じて細分を進め、裏込構造は用いる素材（石材か土か）をもとに大別し、横穴式石室を含めてこれらの分析をできる244事例を対象に検討した。

その結果、模様積石室を中心として、自然石積石室に石材を多用する裏込（馬蹄形控え積）が対応する一方、切石積石室に土を多用する裏込（土の互層）が対応する傾向を確認した。両者の分布は前者が県北西部（児玉周辺）に集中し、後者が県央部（比企周辺）に集中する。これに基礎構造が自然地形と古墳立地に対応する形で組み合わさり、横穴式石室だけでなく、各部が複合した古墳構造として分布する。その動向は分布のピーク（第2期・第3期前半）から古墳築造の終焉（第3期後半）まで維持される。

はじめに

古墳は築造する範囲を整地して支持構造を設ける。横穴式石室をもつ古墳の場合、その構造を顕著に確認できる部分は横穴式石室下にある。本論ではこれを横穴式石室の基礎構造と呼ぶ。

横穴式石室の基礎構造は古墳の築造工程のなかでも初期に設けられる点から、墳丘の高さや横穴式石室の立面的位置、ひいては古墳の景観などを規定する古墳構造の根幹に関わる重要な構造である。

本論ではこの基礎構造ともうひとつの支持構造である裏込、そして横穴式石室の三者を複合することによって、一地域における古墳構造の分布と変遷を捉え直した。

今回は埼玉県内の古墳時代後期・終末期における横穴式石室をもつ古墳を対象とした。

第1章 横穴式石室の基礎構造と裏込構造に関する先行研究

第1節 先行研究

横穴式石室に関する研究は多岐にわたり、その一部は別稿に記述したので、本論では古墳構造を対象とした調査・研究について見直す（青木弘 2011、青木弘 2013a近刊、青木弘 2013b近刊）。ただし、本論の対象地域とした埼玉県内の研究のみでは、本テーマの動向を十分に把握できないので、ここでは県外の研究を含めて概観し、問題の所在を明らかにしたい。

尾崎喜左雄は『横穴式古墳の研究』において、古墳築造当時の旧地表面を追究する必要性を説

く（尾崎 1966）。尾崎は旧地表面が古墳構築に普遍かつ共通する点から、古墳の位置決定の基準になるとする。そして古墳構築に際し、この旧地表面と古墳構築面が古墳の中でどの位置にあり、どのような人為が加えられているかを探る必要性を主張する。そのうえで旧地表面と古墳の各構造がどの位置にあるかを検討するための発掘調査方法も提示している。

群馬県南下E号墳は横穴式石室内に朱線が施されていることで著名な古墳である。当古墳は松本浩一・桜場一寿・右島和夫によって、古墳の立地、横穴式石室形態、朱線、石材などについて詳細に検討されている（松本・桜場・右島 1980、松本・桜場・右島 1981）。そのうち桜場一寿による「ほり方」の検討が注目される。桜場は本墳の立地と自然地形の関係から、横穴式石室は「ほり方」内に構築されたと推定する。この「ほり方」は、石室開口部方向を掘り抜くいわゆる山寄せの古墳の形態をとる。そして、「ほり方」を立地・プラン・法面の角度に分けて分類して県内51例の古墳を検討し、5類型を設定した。その上で石室構造と築造時期の判明している7古墳を検討し、「ほり方」をもつ古墳の初源を横穴式石室受容期にあたる6世紀前半代とした。また、この時期の「ほり方」は堅穴系主体部の構築法からの影響と捉える。その一方で、終末期古墳の「ほり方」については、自然地形を利用することによって作業量の省略を意図した構造とする。こうした桜場の「ほり方」に関する一連の見解は、現在でも受け入れられている。すなわち、後期古墳が掘込をもつ場合は堅穴系主体部との関連と捉え、終末期古墳が掘込をもつ場合は作業量の省略と捉えるのである。桜場の研究は「ほり方」単体を対象に分析要素を設定し、分類案を構築した点が重要である。

横穴式石室の構造への認識は、1970年代以降の塚本山古墳群などの調査を経て深まっていく（増田他 1977）。塚本山古墳群では増田逸郎が27事例について検討を進め、控え積みをA類（裏込に砂利・礫・土を利用）、B類（裏込に砂利・土を利用）、C類（裏込に土を利用）に分類した。その時期変遷がおおむねA類からC類へと移り、C類が土のみを利用するという点から、古墳築造の省略化（縮小化）を想定した。

群馬県奥原古墳群は群馬県内の群集墳調査として初期の例だが、報告では横穴式石室の「掘り方」に対する認識が示されている（梅沢重昭他 1983）。ここでは「掘り方」について次のように論じている。

「横穴式石室の主体部を構築するにあたって、その石室の構造と規模に応じた土木工学的な技術が駆使される。それらのうちで最も基本的な技術に石室構築のため安定した基盤作りと水平面の設定がある。この技術は「地形」（じぎょう）と呼ばれるが、前述の作業要素のみにとどまらず、その後の石室用材の使用法や裏込め被覆の方法などに深くかわかることにもなる。本古墳群に普遍的に見られる旧地表面を土壌状に穿つ、いわゆる「掘り方」も地形の一種である。～中略～造墓する首長層のランクづけや葬送地の選定による地理的な条件、築造技術の伝統と革新などが「地形」といった細部の技術までも規定すると考えられる。この考え方を古墳研究の墳丘構築論にまで高めるためにも、今後このような視点からの発掘調査の蓄積も必要である。」と説く。

横穴式石室の基礎構造に注目する必要性と重要性を説く数少ない指摘である。

群馬県綿貫観音山古墳では墳丘と石室の解体調査によって、横穴式石室の石積みや構築面の詳細をはじめ、基礎構造が具体的に判明している（徳江編 1998、徳江編 1999）。本墳は古墳構造の詳細がわかる大型前方後円墳では希有な調査事例である。

群馬県清里・長久保遺跡では14基の古墳が発掘調査され、各古墳に認められた横穴式石室の掘込について規格性が存在する可能性を指摘している（神保他 1986）。すなわち、掘込の平面形が35cm方眼、30cm方眼に合致するという見解である。魅力的な見解ではあるが、群馬県内に限らず各地の古墳で認められる掘込の多くは不整形を呈する例も多く、現状では掘込の規格性を論じることが難しいだろう。

一瀬和夫は大和を中心とした終末期古墳の墳丘について、整地作業や墓道の設置など、墳丘盛土の造成に関わる工程と合わせて検討を行った（一瀬 1988）。その中で掘込地業について、終末期古墳にみられる古墳築造予定地の掘り込みと土による入念な整地作業に寺院の掘込地業との関連を指摘する。一瀬は古墳盛土と寺院基壇の比較、横口式石槨と寺院基壇化粧石の比較を通して、7世紀後半前後の終末期古墳の構成は一寺院の一基壇にも及ばない労働力の投資だとする。その上で、終末期古墳築造の意義の中に古墳築造の衰退を捉えている。

和田晴吾は古墳の埋葬施設に関して、前期古墳から終末期古墳まで通覧し、墓壇の類型化を行った（和田 1989）。そのうち、横穴式石室については「掘込墓壇c類」と「無墓壇」の2種類をあげている。

埼玉県榑ノ下古墳群の発掘調査では、18基の古墳について破壊がひどいものを除き、その構築順序を層序や各遺構の新旧を基に詳細に記している（岩田・細田 1994）。このような記録方法が採られた理由は、破壊を被り遺構についての情報が減少した古墳であっても、できるかぎり情報を獲得するためであった。その結果として、横穴式石室の基礎構造と構築過程に関する知見を提供しており、画期的な調査だったといえよう。

土生田純之は横穴式古墳の構築過程を次の3点から検討した（土生田 1994）。1点目は奈良県見瀬丸山古墳をもとに提起された石室の改造、2点目は長野県大室23号墳を代表とした「墳丘内埋没石積施設」の存在、3点目は山口県岩谷古墳の事例から見出した「第一次墳丘」と「第二次墳丘」の存在である。以上の分析を通して、横穴式石室の構築過程に際して複数の段階が踏まれた点を確認した。土生田氏の論考は横穴式石室の構築技術に関して単独で扱った数少ない研究事例であり、古墳築造技術研究に大きな影響を与えている。

各地における研究を概観すると、鈴木一男は栃木県飯塚古墳群で確認した砂礫裏込の横穴式石室を検討し、県内での分布と変遷について考察している（鈴木 1994）。筈瀬明宏は九州地方の筑前や肥前に分布する古墳を対象に、墓壇や盛土の形態について分類し、その変遷について検討している（筈瀬 1996、筈瀬 2004）。森格也は香川県の横穴式石室を対象に石室下部構造の集成を行い、礫床の形態と排水溝の形態に注目している（森 2002）。菊池吉修は駿河における横穴式石室

の裏込に注目し、土や礫を用いる裏込について検討している（菊池 2005）。とくに礫を用いる事例について駿河東部における地域的特色を見出した。

土生田純之は『古墳築造の復元的研究』において、改めて横穴式石室をもつ古墳の構築過程について言及する（土生田 2003）。

まず、横穴式石室をはじめとする内部主体と墳丘の双方を、古墳を構成する要素の一部として理解し、一体として捉える必要性を説く。そのうえで横穴式石室をもつ古墳の構築過程の時間軸の中で、作業過程を復元的にとらえ直すという問題意識のもとに古墳構造を分析する。分析のなかで個々の古墳が内包する構造上の特徴、すなわち「主体部構築用作業通路」「墳丘内埋没石積施設」「付加羨道」と呼ぶ諸構造に代表されるような、完成形として古墳を外見するのみでは抽出し得ない構築過程の構造的特徴を見出している。「墳丘内埋没石積施設」は全国各地の古墳を事例としてあげ、その構造が古墳を安定させる意味を持つ点から、群馬県下の「裏込め被覆」や新潟県牧村宮口古墳群における「外被礫」の周囲をめぐる「周縁列石」についても関連する工法として注意を促す。それとともに、こうした石積み施設をもたずとも、同様の構築過程が存在することを確認した上で、横穴式石室をもつ古墳の構築が複数の工程に分離される点を普遍的な構築方法としている。これは、一瞥するとさも当然のことと思われようが、土生田が検討した諸構造は、単に工程が分かれるとしつつも、それは他構造との関連や、立地による構造の変化、そして構築過程上の儀礼行為などをも考慮しており、考古学上で細別された構造や他の要素を結びつける必要性を提起していると言えよう。

これは遺構の分析上、発掘調査報告書に掲載された情報に対して、研究で扱われる情報に偏りがある現状に通じる課題である。たとえば個々の古墳の報告では、構築過程を復元する事例も多くなっているが、それを研究上で包括する分析、そして分析の先にある築造技術体系の考察は盛んとはいえず、途上にある。

右島和夫は群馬県の横穴式石室をもつ古墳を中心に研究を進め、田篠1号墳と八幡観音塚古墳の築造工程を分析している。とくに田篠1号墳では調査当時から綿密なデータ収集が行われ、学ぶところが多い（右島 2003a, 右島 2003b）。

青木敬は横穴式石室の構築に関わる土木技術として、石室基底部構造、石室の所在位置、裏込めの形態、羨道部について各地の事例をもとに検討している（青木 2004, 青木 2005）。また、群集墳の構築技術を検討するなかで、「掘形」を分類した（青木 2005, 青木 2011）。1類は堀形をもたず、旧地表面上に石室を構築し、2類は堀形をもち、それぞれ石室下に盛土を行うか否かで細別が可能とする。両分類の変遷は、1類（6世紀前半）→2類（6世紀末～7世紀初頭）とし、この分類を群集墳に当てはめた結果、パターン1（1類と2類のどちらかが主流だが細別が異なる。同一の土木技術者集団から枝分かれした二つの集団が古墳築造に関わる）とパターン2（1類と2類が併存する場合。全く異なる系譜を持つ2つの土木技術者集団がそれぞれ築造に関わる）に群集墳の傾向が分かれ、北武蔵では複数の技術者集団が群集墳の築造に関与していたと推定した。加えて、北武蔵と対照

をなすのが近畿地方であり、当地方では広い地域で共通した技術的基盤を保持していたとし、関東地方と近畿地方の地域社会の差異を見出す。また、古墳における掘込地業については、鶴ヶ丘稲荷神社古墳例が掘込地業と石室主軸の間にずれが生じていることから、石室構築と基礎地業を行う土木技術者は別々の集団とした（青木 2004）。この研究では横穴式石室の構造から、地域ごとの古墳築造集団の差異を考察しており興味深い。

新山保和は群馬県内の古墳を対象に、横穴式石室の構築面に注目して築造方法を検討した（新山 2006）。新山氏は石室構築法を「掘り方構造」、「控え積構造」、「複合構造」の3類型に分類する。この分類をもとに分析を行った結果、「掘り方構造」と「控え積構造」の技術的な差は、地域差ではなく系譜差であると捉えた。

しかし、掘方と控え積は、前者は旧地表面面に対する方法であって、後者は石室の石積に対する方法である。新山氏が複合構造を唱えるように、両者は密接なつながりが工程上認められるのは確かだが、掘込と対照的な構造は控え積ではなく旧地表面以上の高さに石室を構築する構造である。氏が「控え積構造」として扱っている資料は、結果的に旧地表面以上の高さに石室をつくる事例が該当しているものの、分類方法にやや問題を残す。

青木敬は古墳の中で、横穴式石室が墳丘のどの位置に構築されるかといった墳丘と石室の相関性に注目し、列島各地の後期・終末期古墳を対象に分析を行った（青木敬 2007）。その結果、墳丘と石室の相関性に関して、墳丘優先型（前期古墳以来の墳丘規模を優先する構築法）、石室優先型（後期古墳から始まる横穴式石室を古墳の中心におく構築法）、折衷型（墳丘規模と石室の位置両者をともに優先した構築法）の3つに分類を行った。その上で、この3分類の分布変化から、墳丘優先型から石室優先型と折衷型への推移が認められるものの、地域によって多様性も残る点を指摘する。特に関東地方の古墳では、墳丘規模の検討から終末期において畿内の影響を認めつつも、地域独自の古墳観が維持されていた点を明らかにしている。青木氏の考察は、墳丘と石室の関係について明快な3分類を提示しただけでなく、古墳と石室の構築技術、および構造から地域性と地域間の影響関係を抽出した点で重要である。

寺前直人は兵庫県勝福寺古墳と京都府井ノ内稲荷塚古墳の調査、および近年の大阪府今城塚古墳の調査成果を踏まえて、畿内型横穴式石室の基礎構造について検討した（寺前 2007）。なかでも「敷石状遺構」と呼ぶ石室下に礫による基礎地業を行っている事例を検討し、それらを敷石基盤型A類（敷石状遺構の厚さが40cm以上）、B類（敷石状遺構の厚さが40cm以下）に分類した。その上で畿内における横穴式石室の基礎構造を立地形態との関係から、地山基盤型、盛土基盤型、敷石基盤型A類に分け、古墳選地と基盤工法が相互に関連する点を明確にした。また、敷石基盤型A類については、本類が6世紀初頭（MT15型式期）に認められる点から、大阪府高井田山古墳や奈良県市尾墓山古墳といった畿内型横穴式石室の定型化と関連をもって出現したとする。寺前氏の指摘は石室構造の定型化と構築技術の共有を考える上で示唆に富む。

筆者は以前、武蔵地域を対象に横穴式石室に掘込地業が認められる事例の分析を行い、掘込形

態、地業の方法、地業規模を個別に検討し、6つに分類をした（青木 2009）。その結果、掘込地業には従来の指摘通り、寺院建築技術との関係で捉えられる事例が認められるとともに、古墳築造技術に系譜が求められる可能性のある事例も抽出した。

第2節 問題の所在

横穴式石室をもつ古墳構造の研究は、横穴式石室の構造や石材加工などに関する分析が多く、基礎構造や裏込といった支持構造への注目はまだ高いとはいえない。各地の発掘調査報告書では、その特徴を取り上げているが、他構造との関わりや古墳の築造集団を推定する目的で注目を受けるようになったのは近年になってからである。

奥原古墳群の発掘調査は基礎構造に関して現在にも通用する重要な提言をしている。このなかで、基礎構造が古墳の築造工程上、横穴式石室の構築に影響を与えるとする点、そして古墳の階層性・地理条件・築造技術の発達という3要素が基礎構造の細部の技術まで規定する可能性があるという指摘は重要である。ただし、基礎構造は、横穴式石室を構築し、古墳を完成させるための一工程であり、いわば過渡的な構造といえる。そのため、分析に際しては横穴式石室との関わりなくしては十分な結果が得られないだろう。また、指摘された3要素はどれも重要な要素だが、これらを複合した築造技術体系は必ずしも明らかではない。

すなわち、これは古墳築造技術の体系がどのような仕組みで成立していたのかという課題につながる。古墳築造技術の体系とは、ひとつの古墳を築造するための枠組みとともに、地域や時期、古墳が内包する階層性や系譜などに規定される古墳間をつなぐ築造のシステム・体制と言える。この築造技術の体系は古墳を対象とする限り、古墳の政治・社会システムの側面と不可分である。たとえば各地の後・終末期古墳研究では、菊池吉修による横穴式石室の階層性や松崎元樹の一地域を対象としたモデルなど、階層性に関する様々なモデルが提示されている（菊池 2003、松崎 2007）。これに対して古墳築造技術はどのような対応をするのか。各地域にはすでに膨大な基数にのぼる発掘された古墳が存在する。これらを対象として古墳築造技術を分析して階層モデルに対応させることで、古墳の階層性を実現させた土木技術の体系を明らかにし、国家形成過程の土木技術史的側面を追究することが古墳築造技術の研究には必要だろう。

本論では上述の課題に到達するための第一歩として、まず古墳各部の構造を分類し、その分布と変遷を考えたい。

第2章 基礎構造と裏込の分類

第1節 分析の方法

基礎構造は横穴式石室を構築するための支持構造であるため、横穴式石室の構造とともに検討する必要があるが、その際、裏込構造とあわせて検討を進めたい。裏込構造は横穴式石室の壁体

を支持する構造で、石室の石積みと同時並行で構築する事例が多い。基礎構造が横穴式石室の下部を支持するとすれば、裏込構造は背後を支持する。基礎構造と横穴式石室構造、裏込構造を関連づけ、対象地域における古墳構造の性格を検討する。なお、横穴式石室の分類は、袖構造・平面形・石積み・石材加工をもとに形式分類を行った（付表）。

また、墳丘盛土は横穴式石室との関連では、石材運搬と石積み作業の実態を追究する上で重要な構造だが、本論で扱う事例の墳丘盛土はローム土や黒色土を互層状に積む構造が大半を占める。その積み方は墳丘中心部が厚く、外部に向かって薄く傾斜する。こうした状況から、本論では墳丘盛土までは細かく分類していない。

第2節 基礎構造の分類

用語について 基礎構造は用語や発掘調査報告書における記録方法が統一されていない。例えば用語としては「基礎構造」のほかに、その形態をもとに「掘（り）方」「掘（り）形」「掘込」「地下式（半地下式）構造」と呼ばれたり、横穴式石室に対する位置をもとに「下部構造」「基盤」「石室構築面」などと呼ばれる。

本論では、この構造が古墳の築造工程の一工程・一構造であり、土木や建築における「基礎」という用語とも対応させる意味を含めて「基礎構造」という名称を用いる。

基礎構造の大別 古墳には古墳を築造する集団が保有する技術、投資できる労働力、利用できる材料、期間等、古墳時代当時の社会的制約とともに、選地した土地の土質や地形等の自然的制約の両者が相まって、各地で様々な構造が存在することが予想できる。基礎構造もその影響下にあると考えられ、極端にいうと一事例一分類というような多様性を持ち、地域内・地域を越えた比較が困難となる。とくに基礎構造は古墳が完成した状態では眼に見えず、自然地形を掘り込む、土や石を敷くといった単純な造作による構造のため、基準・規則性が横穴式石室以上に把握しがたい性質をもつ。まずはこの構造がもつ単純な要素から分類を試みるべきだろう。

横穴式石室の基礎構造は、すべからく旧地表面に対する造作を行うため、掘込をもたないタイプと掘込をもつタイプとに大別が可能である。この大別から各種の基礎構造を捉えるための類型化が可能である（図1）。

まず、掘込をもたないタイプは横穴式石室の構築面が旧地表面よりも高い位置に造られる。

墳丘盛土類型 墳丘盛土上に横穴式石室を構築する事例が該当する。これは横穴式石室の構築面とともに、墳丘盛土の第一段目をなす。本類型はその二つの役割をもつため、墳丘盛土全体と横穴式石室構築面周辺とでは、やや異なる盛土方法を行う事例もある（埼玉將軍山古墳、群馬県綿貫観音山古墳など）。なお、八幡山古墳や中条大塚古墳など終末期古墳では、同様の事例を「基壇」と呼ぶ報告もみられるが、「基壇」という名称は本来、寺院・官衙の基礎構造に用いられる名称である。本論では「基壇」上に横穴式石室が構築される事例でも、その「基壇」が墳丘の第一段目としての役割ももつと考えられる事例は墳丘盛土類型に含めた。

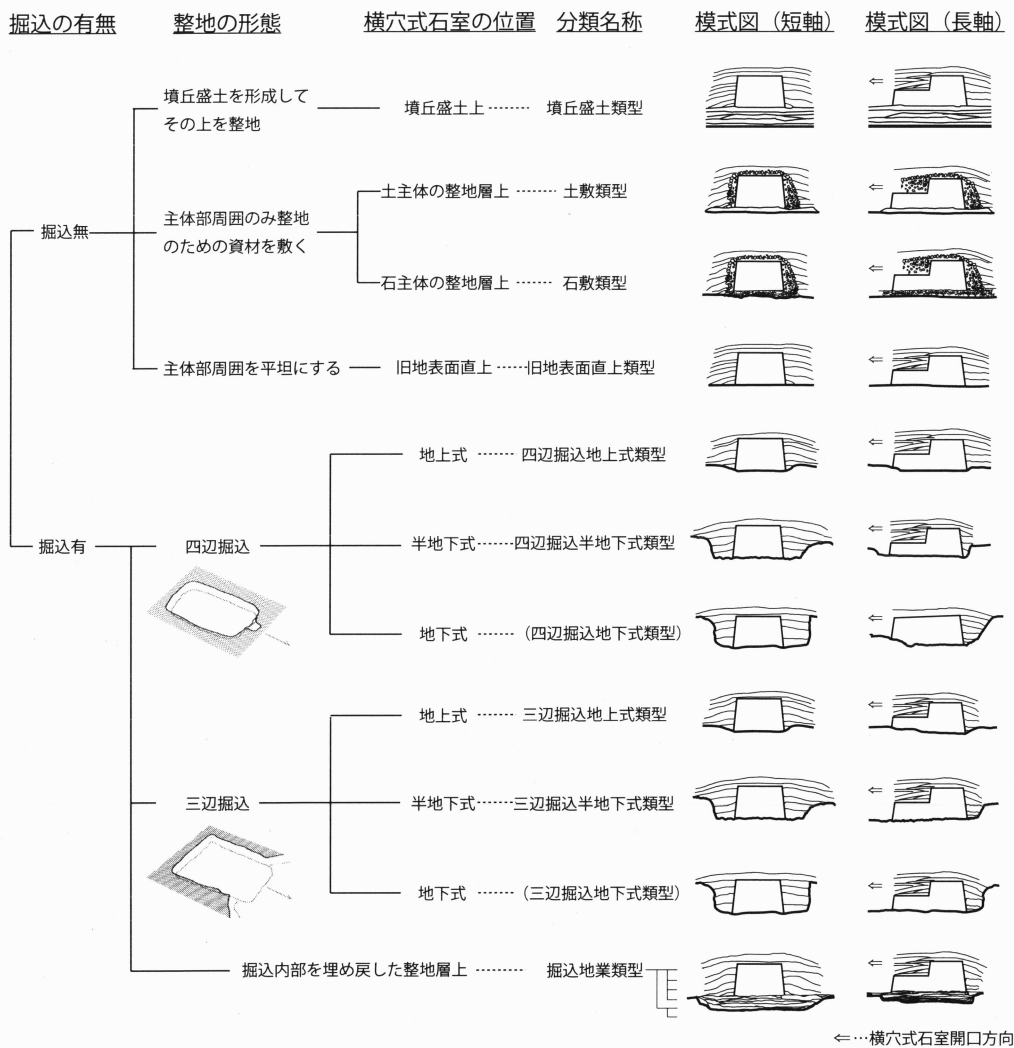


図1 横穴式石室基礎構造の分類

墳丘盛土類型は、横穴式石室構築面周辺の造作によって細分できる可能性がある。大阪府今城塚古墳など畿内の事例では、横穴式石室下に礫をつめた構造が確認されている（寺前 2007）。

土敷類型 墳丘盛土の役割ももつ墳丘盛土類型と異なり、横穴式石室構築面周辺にのみ、土を敷く事例が該当する。この事例では、旧地表面の上に数cmから数十cmの厚さで土を敷く⁽¹⁾。白石古墳群、猪俣北古墳群などに認められる。

石敷類型 横穴式石室構築面周辺にのみ、石材を敷く事例が該当する。土敷類型とは用いる材料が変わる。石材は砂利や礫を中心に使用し、土が混じる例も存在する。この石敷類型は群馬県富岡市周辺に多くの事例が認められ、田篠古墳群などでは解体調査に伴い構築過程が明らかにされている（右島 2003）。埼玉県内では青柳古墳群や白石5号墳に認められる。

旧地表面直上類型 横穴式石室構築面周辺にとくに目立った造作はせず、旧地表面を整地して直に横穴式石室を構築する事例が該当する。長沖古墳群、鹿島古墳群、小前田古墳群、田木山古墳群などに認められる。

一方、掘込をもつタイプは横穴式石室の構築面が旧地表面よりも低い位置に造られる。掘込の形態については、横穴式石室の開口部と掘込の深さから細分を行う。

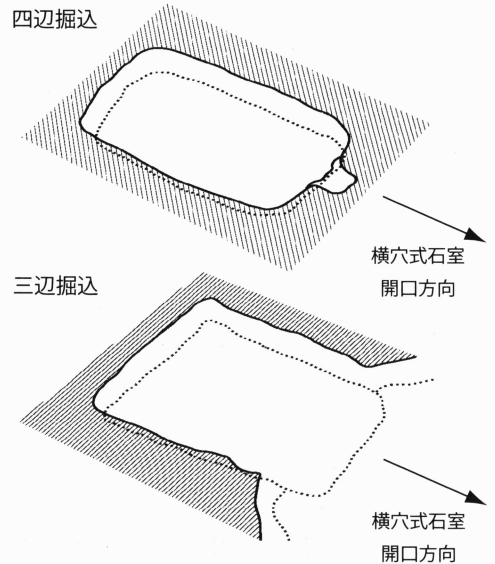
掘込と横穴式石室の開口部構造 掘込をもつ基礎構造では、横穴式石室の開口部をどのようにつくるかが問題となってくる。横穴式石室は、框構造をもつ事例など段差をもつ一部の事例を除いて、多くの事例は奥壁から開口部までおおむね水平を維持した構造をもつ。また、開口部には前庭部や墓道などが続く例もある。そのため、水平を基本とする横穴式石室において、段差が生じる掘込を基礎構造に採用することは、開口部方向の掘込端部をどのように処理するかが問題となる。本論では、横穴式石室開口部の掘込構造について、四辺掘込と三辺掘込とに細分する(図2)。

四辺掘込 掘込の構造は開口部含めて掘込端部(上端)を残す形をとる。開口部方向の掘込端部には羨門が位置することが多い。

三辺掘込 掘込の構造は横穴式石室開口部を切り開いた形をとる。開口部には前庭部が取りつく事例が多い。これらの開口部は周溝の内部に位置する事例もみられる。斜面地に立地する所謂「山寄せ」構造の古墳は、斜面地形を利用する点が強く特徴づけられているが、開口部を切り開く事例が多いためこの事例に含められる。

掘込の深さと半地下式類型・地上式類型 基礎構造の掘込は平面形態、規模のいずれも多様である。その平面形態は横穴式石室規模に左右されると考えられるが、深さについては一定した見解はなく、横穴式石室が旧地表面より下位にある状態を「半地下式(半地下構造)の横穴式石室」と呼び、定義が曖昧な現状にある。横穴式石室の基礎構造は掘込をもたない事例を含めて、旧地表面に対する高低差があることは事実である。とくに旧地表面を掘り込んだ中に横穴式石室を構築するような事例では、その構造に地形を利用して墳丘盛土の量を減らす効果があると捉え、古墳築造の省力化や古墳規模の縮小化をみる研究もある。反面、群馬県阿弥陀古墳の調査成果における右島和夫の考察にみられるように、横穴式石室が「基壇面」上に構築される点から地域性や画期を見出す見解もある(右島 2010)。

そもそも基礎構造は横穴式石室がどの高さに位



※四辺掘込の開口部は掘込が突出しない事例もある。

三辺掘込の開口部は前庭部がある例を想定。他の形態もある。

凡 例：斜線…旧地表面 実線…掘込上端 破線…掘込下端

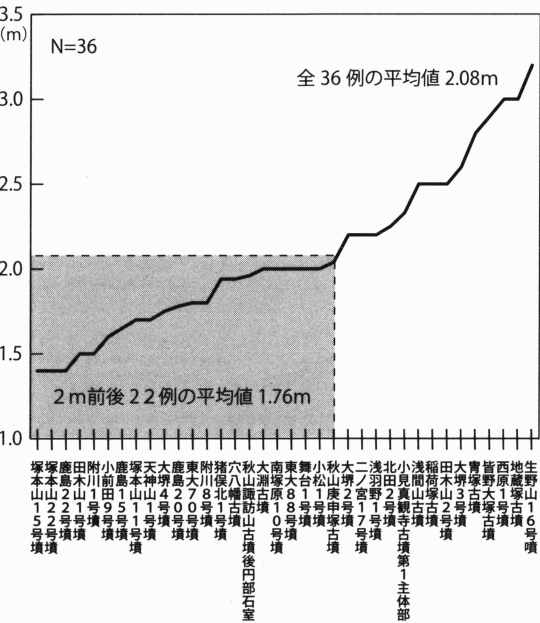
図2 四辺掘込と三辺掘込

置するかを決める重要な性質をもつ。横穴式石室構築面の位置は、開口部構造、墳丘構造など、基礎構造設定以後のすべての古墳構造に影響を与える。それとともに古墳の景観、追葬・墓前祭祀といった完成後の外観や使用面にも関わる要素である。基礎構造の高低差は重要な意味をもつと考えてよいだろう。

さて、この基礎構造の高低差を極力客観的に捉えるため、本論では掘込の深さを分類する。掘込の深さはその内部に構築する横穴式石室の高さ、あるいは使用する石材の大きさに対応した相対的なもので、掘込の深さだけに注視しては本質から外れた分類となる。これを分けるにあたり、埼玉県内の横穴式石室で天井部まで遺存する事例、および天井石直下まで側壁が遺存する可能性の高い事例について、その玄室高に注目した（表1）。別稿で集成した埼玉県内の横穴式石室1024事例中、玄室高をうかがえる事例は36例である（青木 2013b）。これらを見ると、1.5 m前後の事例から3 mを超える事例まで様々な高さがあり、36例の玄室高の平均は2.08 mである。そのうち3 m前後の事例を除いた22例の平均は1.76 mである。横穴式石室の高さは2 m前後にまとまることがわかる。

この横穴式石室平均高2.08 mを基準に掘込の深さを考えると、二分の一の1.04 m前後がいわゆる「半地下式」の範疇といえる（表2）。ただし、横穴式石室の高さと掘込の深さ両者がわかる塚本山15号墳と塚本山11号墳をみると、前者は玄室高1.4 m・掘込深さ0.5 m、後者は玄室高1.7 m・掘込深さ0.6 mとなり、横穴式石室の高さが平均値よりも低く、その分掘込深さに対する視点も変えなければならない。すなわち前者は石室高1.4 mの二分の一0.7 m、後者は石室高1.7 mの二分の一0.85 mを基準にすべきだろう。両者ともにこの数値に対する掘込の深さは約20 cmの

表1 埼玉県内の横穴式石室の高さ



差がある。これらを含めた表2掲載事例をみると、深さ数cmから0.4 mまではなだらかに分布し、0.4 mを超えると急勾配となり、より深い事例が増える。本論では、掘込の深さが0.5 m以上を半地下式タイプの掘込とする。

次に、掘込の深さが0.4 m以下の事例については、横穴式石室の高さの平均値2.08 mに対して浅く、石材が地上に出る範囲が多い点から地上式類型として扱う。田木山2号墳は石室高2.5 mに対して、掘込の深さが0.3 mと浅く、壁体が地表面に2 m近く表出している状態を確認できる。

なお、上述のようにこの横穴式石室の高さに対する掘込の深さは、各事例によって

石を据える事例がある。墳丘盛土類型・石敷類型・旧地表面直上類型・地上式類型のうち18例にこのような事例が認められる。そのうち旧地表面直上類型に12例と比較的多く確認できる。ただし、これは基礎構造単独の問題ではなく、横穴式石室の根石の設置方法に関わる。根石⁽²⁾の設置方法は多様で、基礎構造と横穴式石室の石積みとが複合する要素で、本論を踏まえた石積みや使用石材に関わる分析が必要なため、ここでは詳述を避け、事例の提示にとどめたい。

また、今回の事例には確認できなかったが、神奈川県桜土手古墳群では横穴式石室が掘込内に造られ、掘込上端に天井石が表出する地下式類型といえる事例がある。横穴式石室の構造は異なるが、同様の事例は東京都瀬戸岡古墳群など多摩川上流域でも認められる。

各類型の代表例を図3に提示した。

第3節 裏込の分類

裏込は横穴式石室の奥壁・側壁背後を支持する構造である。その平面形態は「馬蹄形」と表現されるように、横穴式石室を囲む形をとることで共通する。裏込の断面は横穴式石室の石積みに対応する層序をとり、その層は横穴式石室背後が厚く、外方に向かうに従って薄くなる事例が多い。裏込は古墳築造上、共通した平面・断面形態をもち、基礎構造と関連することで細かな形態の違いが生じる。

裏込が事例間で最も差異を生じる点は、利用する素材にある。裏込には石材（砂利・礫）や土（ロームブロック・黒色土・粘土など）といった材料が用いられ、石材利用の裏込と土利用の裏込とに大きく分けることができる（図4）。なお、横穴式石室が加工石材を積む場合、現地加工に伴う石屑が裏込の層間に確認できる事例もあり、石積みと石材加工と裏込の三者の工程が追える。馬蹄形控え積 石材（砂利・礫）を多用し、裏込の平面形態が馬蹄形を呈する。裏込と墳丘の間は拳大の礫によって控え積が施される。この控え積がない事例も認められる。

土の互層 土を多用し、異なる種類の土を互層状に積んで石室を支持する事例が多い（第一次墳丘）。控え積を施す事例は少ない。

いずれのタイプも控え積を施す場合には、裏込の構築が単独で行われるが、控え積をもたない場合には、墳丘盛土と連動して構築される事例もある。

第3章 各類型の分布と変遷

埼玉県内の横穴式石室は別稿で集成作業を進め、現在1022（1024）事例を数える（図5）（青木2013b）。そのうち横穴式石室を確認可能な事例は515（517）例、横穴式石室と想定できる事例は507例である。確認事例中、白石5号墳と川越市牛塚古墳では、横穴式石室の玄室内を追葬に伴い造り替える行為をしており、これら2事例を加えた数が括弧内の数値である。

基礎構造と裏込では、想定事例507例はどちらの構造も不明な事例が大半を占める。確認事例

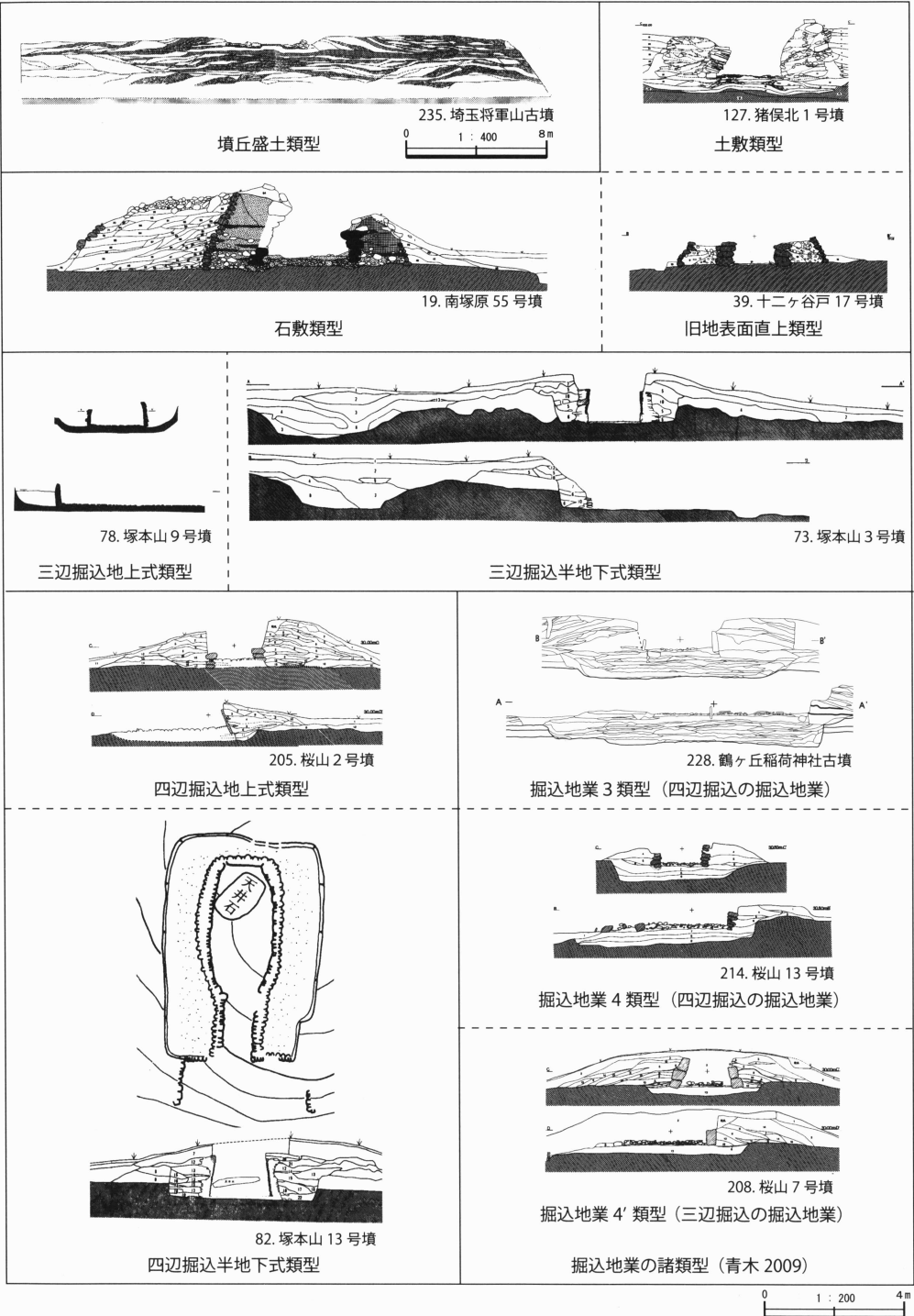


図3 横穴式石室の基礎構造代表例

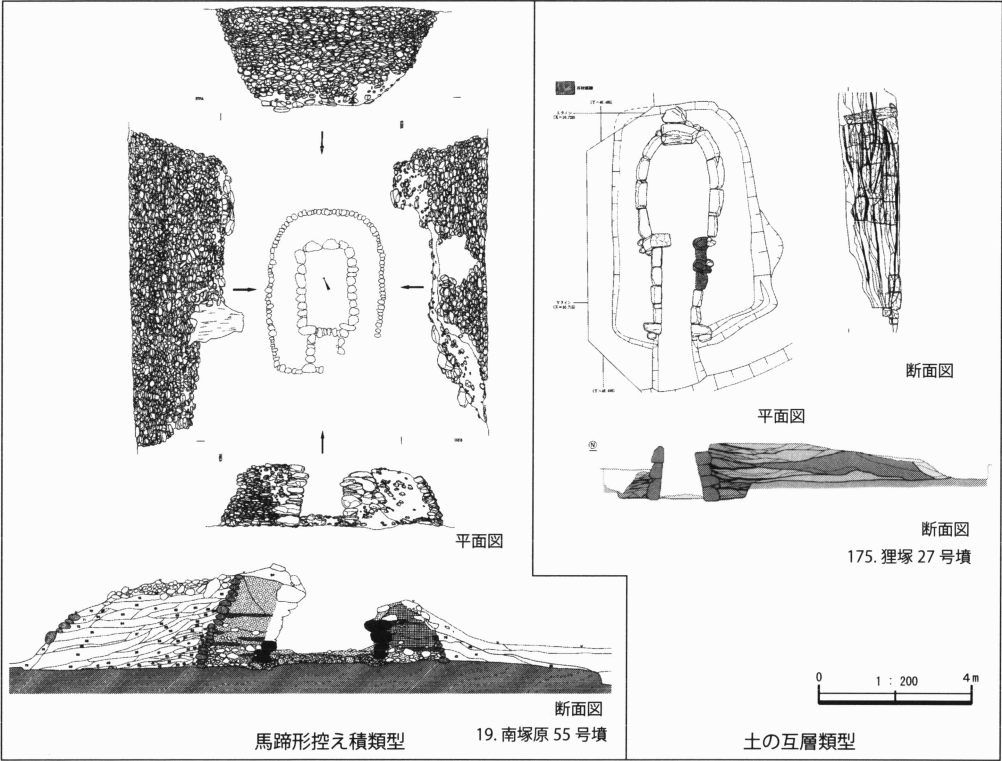


図4 裏込の分類

515 (517) 事例のうち、横穴式石室・基礎構造・裏込の三者がすべてわかる事例も限られ244事例となる。分析対象となる各部構造のすべてがわかる事例は限られており、事例の様相がそのまま地域全体の特徴と言い得るわけではないが、本論ではこれらを中心に検討を進めていく。

なお、本論で用いた分布図は近世の河川改修前の状態を極力考慮した(図6) (青木 2013a)。

さて、埼玉県内の横穴式石室について、小林孝秀は増田逸朗らの研究を基礎として3つの画期を設定している⁽³⁾ (小林 2008)。第1期は「横穴式石室の導入」、第2期は「無袖式石室の両袖化」・「幅広形で胴張りをもつ単室両袖式石室の出現」・「片袖式石室の採用と展開」・「胴張りをもつ複室両袖式石室の導入」、第3期は「単室両袖式石室の展開」「複室両袖式石室の展開」を画期的動向と捉える。本論では小林の設定に加え、第3期を便宜的に第3期前半(7世紀前葉)と第3期後半(7世紀中葉～末)とに分けて、各類型の変遷をみてみよう(図7)。

第1期 7事例が該当する。本例は埼玉県北西部に集中し、無袖短冊形石室が比較的多い。帯刀20号墳と原田1号墳は遺存状態が悪く、石室形態には注意を要する。基礎構造では墳丘盛土類型と推定される事例から、土敷類型、旧地表面直上類型がみられ、裏込には馬蹄形控え積類型が認められる。基礎構造をみると旧地表面よりも高い位置に横穴式石室を構築する古墳構造といえる。これらの事例の裏込に馬蹄形控え積類型がみられる点は、1期以降、県北西部にこの裏込が

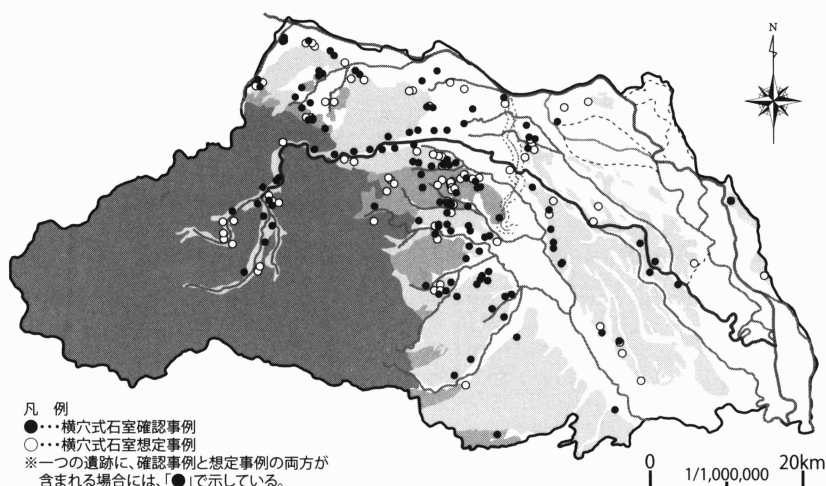


図5 横穴式石室をもつ古墳の分布状況

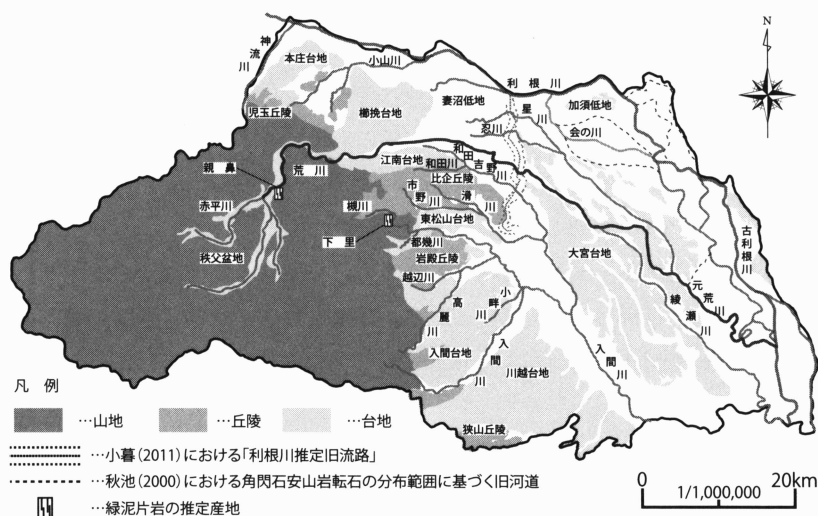


図6 近世改修前の埼玉県の地形と河川

集中し、かつ石材を多用する特徴的構造である点からみても、系譜を追究する上で重要である。第2期 72事例が該当する。この時期は小林が4つの特徴を挙げたように、様々な形態の横穴式石室が造られる。胴張形石室の導入に加え、模様積石室、互目積石室、切石積石室などが県内各地に分布する。その分布には一定の集中が認められ、自然石を用いた模様積石室は県北西部、角閃石安山岩を用いた互目積石室は県北西部から北東部の利根川流域、凝灰岩を用いた切石積石室は比企丘陵を中心に分布する。基礎構造のうち土敷類型と石敷類型は模様積石室の分布域に集中し、裏込の馬蹄形控え積類型も同地域に分布する。県北西部における模様積石室を中心とした自然石利用の横穴式石室は、これらの基礎構造と裏込とが組み合って認められ、横穴式石室だけで

なく、古墳構造として共通した分布域を形成していることがわかる。

第2期から確認できる模様積石室は群馬県藤岡市を中心とする横穴式石室である。石敷類型や馬蹄形控え積類型も群馬県富岡市など県南西部に認められる点から、埼玉県北西部は横穴式石室に加え、基礎構造・裏込も当該地域と関係の深い可能性が高い。

県北西部に分布する古墳のうち、小島御手長山古墳は特異な基礎構造をもつ。当古墳は横穴式石室の棺床面を舌状に掘り残し、根石設置部分を含めた周囲を馬蹄形に掘り込み、その内部を土で互層状に埋め戻す。掘込の範囲は長軸8.6m以上×短軸10.58mに及ぶ。他の基礎構造には、根石設置部分を溝状に掘り、その平面形態がU字形を呈する事例はあるものの、小島御手長山古墳はその形態や規模が他とは一線を画する。当古墳は、墳丘長42mと旭・小島古墳群中でも大規模で、かつ、挂甲小札、直刀、鉄鏃などの副葬品が比較的豊富に出土しており、群内でも有力墳と考えられる。有力墳は規模だけでなく古墳構造も他と異なる可能性があるだろう。

また、基礎構造には掘込地業類型とした構造が寺浦2号墳と猪俣北13号墳にみられる。

寺浦2号墳では「旧地表面と考えられる砂を多く含んだ黒褐色土を20cm前後掘り下げる。続いて褐色粘土層と淡黄褐色土を使用した版築を40cmの厚さに盛り、ベット状の基壇を構築する。」という基礎構造が確認されている（外尾1992）。同様に、猪俣北13号墳では「旧地表面を25cm程掘り込み突き固める。その上に、暗茶褐色土・黄茶褐色土・黄褐色土を3層積み再び突き固める。次に、根石設置下に径約10cmの石を置き、隙間に砂利を込める。」という基礎構造がみられる（丸山・中沢1998）。寺浦2号墳例は掘込形態がわからず分類できないが、猪俣北13号墳例は、四辺掘込で掘込地業4類とした構造にあたる。両墳は遺存状態が悪いが、馬蹄形控え積をもつ単室の両袖胴張形石室という共通点がある。両墳の周辺では同じ形態の横穴式石室に石敷類型・土敷類型・旧地表面直上類型がみられ、この2例の掘込地業類型はこれらに類する構造と考えたい。

次に、比企丘陵の古墳を観てみよう。

当地域では第2期に凝灰岩を利用した切石積石室が造られる。このうち、諏訪山4号墳、屋田5号墳、三千塚3号墳（第Ⅶ支群）は無袖短冊形・羽子板形の横穴式石室をもつ。これらは旧地表面直上類型や盛土類型と推定される基礎構造で、いずれも土の互層タイプの裏込がみられる。

そして複室両袖胴張形石室の嚆矢とされる若宮八幡古墳が造られる⁽⁴⁾。複室両袖胴張形石室は第3期以降に増加し、後述するように、土を利用した裏込構造が認められる。無袖短冊形・羽子板形石室を含めて、第2期には凝灰岩切石積石室の裏込に、土の互層類型を行った事例が多く認められる。

さて、第2期は前方後円墳が終焉を迎える時期である。事例中、前方後円墳・帆立貝形古墳は、長沖8号墳、中小前田7号墳、牛塚古墳、南大塚4号墳、埼玉將軍山古墳が該当する。これらの基礎構造には墳丘盛土類型や土敷類型がみられ、裏込は馬蹄形控え積類型や土の互層など、各分布域に存在する他事例と同様の構造をとる。埼玉將軍山古墳は墳丘長90mと今回の事例の

なかでは他とは比較しがたい大規模な構造をもつ。当古墳の横穴式石室は上部構造が不明だが、石室が構築される盛土は墳丘1段目を構成する大規模な構造である。石室構築面周辺の盛土は粘土等も利用して入念に造成しており、このような状況は群馬県綿貫観音山古墳にみられる。

また、南大塚4号墳は半地下式類型・馬蹄形控え積類型の短冊形石室をもち、県内の横穴式石室のなかでは特異な構造で、他県域の事例と比較すべき例外といえよう。

第3期前半 69事例が該当する。県北西部では第2期以降、模様積石室に旧地表面直上類型・石敷類型・土敷類型の基礎構造と馬蹄形控え積類型の裏込が組み合う古墳構造が集中する。また、塚本山古墳群の古墳築造が本格化し、地上式類型・半地下式類型が集中してみられる。これは塚本山古墳群が斜面に立地し、石室構築面を平坦にするための造作と考えられる。

比企丘陵の基礎構造では旧地表面直上類型とともに三辺掘込地上式類型が多い。第2期以降、この地域を中心に単室・複室ともに胴張形切石積石室が数多く造られるが、この横穴式石室には旧地表面直上類型・三辺掘込地上式類型に、土の互層類型が組み合う古墳構造が集中する。これは西戸2号墳やささら3号墳、諏訪山南1号墳、西台7号墳、台耕地稲荷塚古墳といった比企丘陵周辺の切石積石室にもおおむね認められる。とくに裏込の土の互層類型は切石積石室と密接に組み合うようである。

掘込地業は第2期同様、4類（四辺掘込）と4'類（三辺掘込）が散発的にみられる。

鹿島古墳群や小前田古墳群、樋ノ下古墳群、三ヶ尻古墳群などが分布する荒川中流域では、県北西部の馬蹄形控え積類型と胴張形模様積石室、比企丘陵周辺の土の互層類型と胴張形乱石積・切石積石室が混在する傾向が認められる。

中条大塚古墳と八幡山古墳は、草野潤平が同一系列の複室構造石室とし、古墳構造にも共通性を見出している（草野 2008）。両墳は墳丘盛土内に緑泥片岩を敷き込み石室石材を埋め込む堅牢な基礎構造が特徴的である。また、中条大塚古墳では石室床面下に排水溝が施され、埼玉県内では唯一の事例である。裏込には土の互層類型が採用されたと考えられ、切石積石室と組み合う古墳構造といえる。両墳は終末期の有力墳のなかでも大規模かつ緻密に造られた事例である。八幡山古墳につづく地蔵山古墳（事例外）も、おそらく同様の古墳構造をもつと考えられる。

第3期後半 91事例が該当する。県北西部では、模様積石室を中心とした土敷類型・石敷類型と馬蹄形控え積タイプの組合せが上長瀬古墳群や青柳古墳群にみられる。反面、塚本山古墳群、宮内古墳群、白石古墳群では模様積石室や乱石積石室に地上式類型・半地下式類型と土の互層類型が組み合う事例がある。これは塚本山古墳群の報告で増田逸朗が裏込C類として、馬蹄形控え積類型から省略した形態とみなした事例である。

比企丘陵では切石積石室に地上式類型と土の互層類型とが組み合わさる事例が、駒堀古墳群や田木山古墳群、根平古墳群などにみられる。

旭・小島古墳群、樋ノ下古墳群、桜山古墳群では掘込地業4類・4'類が集中する。これらは土の互層類型が伴う。横穴式石室は旭・小島古墳群に角閃石安山岩の胴張形石室、桜山古墳群に

凝灰岩胴張形切石積石室と自然石胴張形乱石積石室といった各地の主要石材を用いた横穴式石室を構築する。群集墳単位で同じ基礎構造と裏込を採用する点は、第3期後半以降の群集墳の形成契機を追ううえで注目すべき事象である。

一方、鶴ヶ丘稲荷神社古墳や鶴ヶ丘1号墳（事例外では小川町穴八幡古墳）といった有力墳にも掘込地業が施される。いずれの古墳も土の互層類型を採用しており、掘込地業の基礎構造には土の互層類型が組み合う傾向が強いことがわかる。

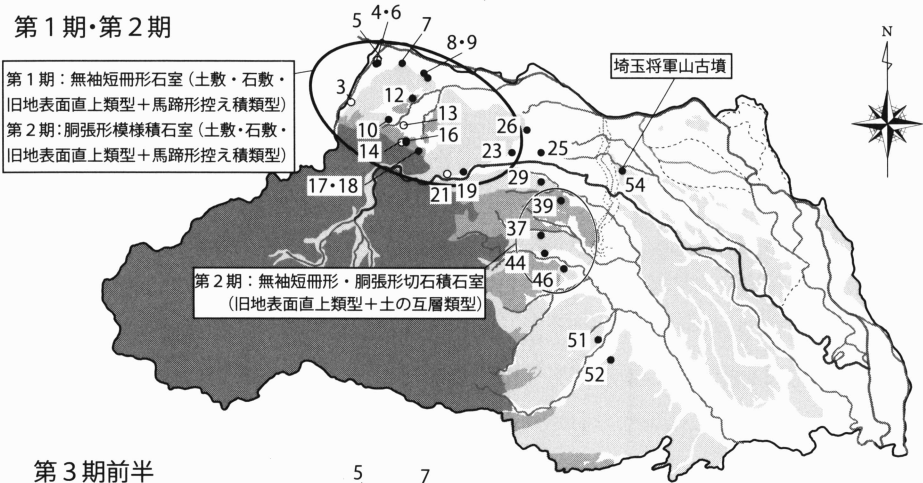
これら掘込地業については、その技術系譜を寺院建築技術と関連させる説もあるが、群集墳例と有力墳とは規模・形態ともに異なり、すべてが同一系譜にあるとは考えがたい。

第3期後半は古墳築造が終焉をむかえる直前の時期に当たる。このうち、長沖11号墳、宮内古墳群、塚本山7号墳、塚本山9号墳、塚本山24号墳、塚本山25号墳、塚本山26号墳、塚本山29号墳、籠原裏古墳群、立野17号墳らは7世紀末から8世紀初頭の築造とされる事例である。これらを見ると、長沖11号墳は馬蹄形控え積類型と模様積石室の組合せで、古墳築造の終焉時期までこの古墳構造が認められる。塚本山古墳群では上述したように馬蹄形控え積類型から土の互層類型に裏込が変わる。立野17号墳にみられるように、切石積石室は地上式類型と土の互層タイプの組合せを維持する。

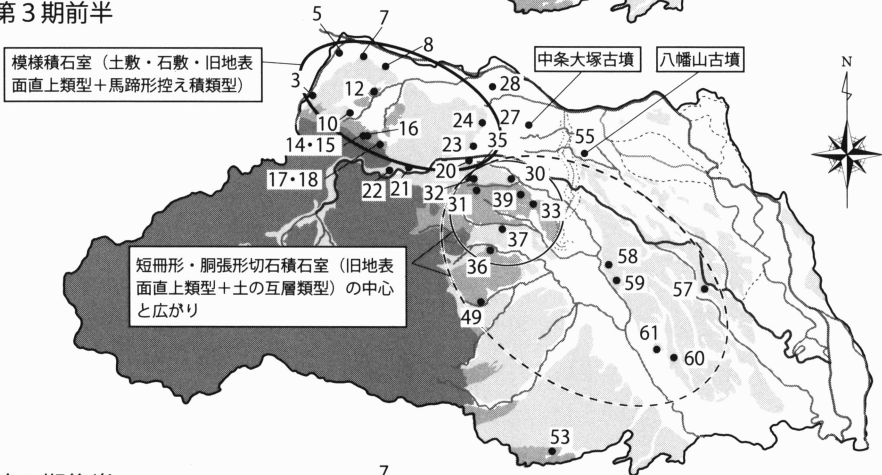
以上より事例中の古墳構造をみる限りでは、古墳築造が終焉をむかえる時期でも、第3期前半に続く構造を維持する事例がある。ただし、古墳築造の終焉という現象を更に検討するには、築造時期が7世紀末に該当する事例数と、当該時期の追葬が想定される事例数の比較が必要だろう。

分布図対応一覧		11	宮内古墳群	22	樋ノ下古墳群	33	東山遺跡	44	下唐子古墳群	55	若小玉古墳群
1	飯塚・招木古墳群	12	塚本山古墳群	23	三ヶ尻古墳群	34	阿諏訪野東遺跡	45	野本古墳群	56	関戸古墳群
2	上長瀬古墳群	13	広木大町古墳群	24	籠原裏古墳群	35	古里古墳群	46	諏訪山古墳群	57	笹原古墳群
3	青柳古墳群	14	白石古墳群	25	石原古墳群	36	行司免古墳群	47	高坂古墳群	58	諏訪山南遺跡
4	大御堂古墳群	15	羽黒山古墳群	26	玉井古墳群	37	月輪古墳群	48	入西古墳群	59	川田谷古墳群
5	帯刀古墳群	16	諏訪林古墳	27	中条古墳群	38	西原古墳群	49	西戸古墳群	60	側ヶ谷戸古墳群
6	下郷古墳群	17	猪俣北古墳群	28	飯塚古墳群	39	三千塚古墳群	50	鶴ヶ丘古墳群	61	植水古墳群
7	旭・小島古墳群	18	猪俣南古墳群	29	万吉下原古墳群	40	田木山古墳群	51	的場古墳群		
8	御堂坂古墳群	19	黒田古墳群	30	瀬戸山古墳群	41	駒堀古墳群	52	南大塚古墳群		
9	塚合古墳群	20	鹿島古墳群	31	塩・古里古墳群	42	根平古墳群	53	海谷古墳群		
10	長沖古墳群	21	小前田古墳群	32	立野古墳群	43	桜山古墳群	54	埼玉古墳群		

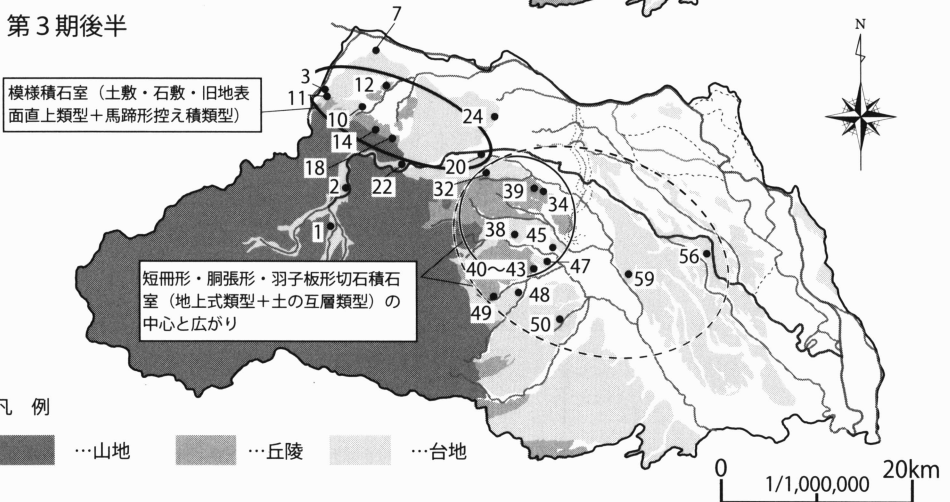
第1期・第2期



第3期前半



第3期後半



凡 例

…山地 …丘陵 …台地

図7 横穴式石室と基礎構造・裏込の動向

第4章 古墳構造の背景

第1節 基礎構造の背景

今回の事例は埼玉県内に限っているものの、そのなかで分類した基礎構造の分布をみると、一地域に集中するタイプ（石敷類型・土敷類型）と、地域全体に分布するタイプ（旧地表面直上類型・地上式類型）が認められる。前者の事例は限られており、一群集墳にまとまるような特徴といえよう。後者の地域全体に分布するタイプは、自然地形との関わりも考慮する必要がある。塚本山古墳群には半地下式類型が多く認められたが、本古墳群は独立丘陵の斜面に立地し、構築面の水平面を得るために斜面を掘り込む構造が必要だったのだろう。今回の事例はほとんどが平坦面や緩斜面に立地しており、地上式類型や旧地表面直上類型が多い。埼玉県内の古墳が立地する地盤は、黒色土を旧地表面とし、黒色土下にソフトローム、ハードロームがある例が多く、深く掘削することなく横穴式石室構築に適した堅固な面を得ることは可能と思われる。

第2節 基礎構造・裏込・横穴式石室の組み合わせ背景

模様積石室に馬蹄形控え積類型が組み合わせる背景は、石室石材に自然石を用いる点を考慮したい。模様積石室をはじめ、自然石を利用した横穴式石室の壁体石積みは、ほぼすべてが小口積みである。そのため壁体の石材は小口面のみが面を揃えて石室内に表出しており、大部分は壁体内部から壁体背後の裏込にかみ合うように置かれる。そのかみ合わせを強固にするには、裏込に砂礫を利用する方法が適していたと推測したい。

また、裏込に用いる砂礫は長沖古墳群での指摘が参考になる。すなわち、「長沖古墳群の石室の後込めに一般的に使われているこの黄褐色の砂礫と細砂は、本古墳の周辺に広がるローム丘陵下の氾濫原地帯から採取できるもので、本古墳の場合も当時の地表面の黒色土を50cm程度掘り下げると、この黄褐色の砂礫層と細砂層を見ることができる。」という（恋河内 2011）。

こうした模様積石室を代表とする自然石積石室に砂礫を用いた裏込が対応する事例は、研究史で触れた栃木県南部や駿河東部のほか、群馬県南西部、多摩川中・上流域、神奈川県秦野市周辺の古墳にもみられる（鈴木 1994、菊池 2005）。これらの横穴式石室の構造はすべてに共通性があるわけではなく、地域間に関係性があったかどうかは今後の課題である。

一方、切石積石室に土の互層類型が組み合わせる背景は、石室石材を加工する点を考慮したい。今回扱った切石積石室は凝灰岩を加工し、裏込の層序間にその加工屑が伴う事例もみられ、石材の設置における最終調整を現地で行っていることがわかる。横穴式石室の石積みは自然石の場合には石材の選択・設置という2段階しかないが、加工石材の場合には、石材の選択・サイズの最終調整・設置という3段階になる。現地での最終調整の作業面は、横穴式石室の高さに応じて段階ごとに高くする必要があり、作業面の確保に裏込と墳丘盛土が利用された可能性を想定したい。

ただし、この想定は作業者が裏込上に立って調整するという横穴式石室外部での行為である。

横穴式石室内部に表出する石材の加工痕には、一つの加工痕が石材間にまたがる事例があり、石積みに際して石室内部でも石材加工を行っていたことがわかる。こうした石室内部での作業方法、作業における高低差の解消をどのように行ったかは定かではない。狸塚27号墳例のように、土の互層類型は墳丘盛土と連結する事例も多く、墳丘から独立した構造をとる馬蹄形控え積類型とは築造工程と築造過程の景観（作業状況）が異なると考えられる（森田・永井 1999）。

埼玉県内の切石積石室だけでなく、群馬県や千葉県の実例など、県外の切石積石室でも土を互層状に積んだ裏込がみられる。そのため、加工石材と土の裏込の対応関係が築造技術として存在したと考えられる。

模様積石室と切石積石室は、それぞれ基礎構造と裏込との対応関係の強い横穴式石室である。両者は石室構造上の共通性だけでなく、基礎構造と裏込が複合した古墳構造として共通性をもつ。

第3節 古墳構造の変遷と築造集団

模様積石室と切石積石室については、第2期から第3期後半まで、およそ1世紀前後にわたって各部構造の組合せを維持する。この二者の古墳を築造した集団は、世代交代を繰り返しつつも、基礎構造・裏込・横穴式石室の組合せを保っていたと考えられる。この組合せを維持するには、古墳築造集団が各部構造の技術をもつだけでなく、石材や土（おそらく木材も）などの資材を獲得できる環境にいる必要があっただろう。

築造技術と資材獲得の参考に、横穴式石室の使用石材重量に関する分析事例をみよう。群馬県富岡市田篠1号墳は、葺石根石径10.4mの墳丘内に約6mの横穴式石室（単室）をもつ。右島和夫の研究によると「壁石材20 t、天井石13 t、基礎地形7 t、裏込め・裏込め被覆30 tを合わせた70 tが石室の関連する石材の総重量」で、葺石・前庭部石材を加えると100 t前後に達するという（右島 2003）。この結果を受けて、右島は本墳のような群集墳内の小規模な古墳の築造に際しても、「習熟した古墳づくりの専門的技術を備えた人とその下に組織化されたチームの存在は不可欠」と言及する。

今回検討した横穴式石室の大半は田篠1号墳と同規模の実例で、県北西部の模様積石室の古墳は馬蹄形控え積に大量の石材を使用しているため、同じ程度の石材が必要だった可能性は高い。

大量の石材を得るには、単に古墳の周辺で石材を集めたというような無計画な体制では難しく、一定の供給地の存在を想定すべきだろう。石材獲得における供給地の存在については、田中広明や森田安彦、鈴木徳雄の各氏が考察をしている（田中 1989、森田・永井他 1999、鈴木 2007）。本論ではこうした古墳築造に必要な「資材」獲得の実態まで言及はできないが、今後、古墳群や群集墳の形成過程を古墳築造の観点から追究するなかで検討を進めるべきだろう。ここでは右島が説くように、群集墳に築造される小規模な古墳であっても、築造に際しては技術集団が存在したと推定するととどめたい。その技術集団の実態については推測を重ねることになるが、基礎構造と裏込、そして横穴式石室が強く結びつく事例をみると、それぞれ別個の技術集団というより

も、各部構造に熟知した集団が一連の工程のなかで技術を駆使して造り上げたと考えられる。

おわりに

本論では横穴式石室の基礎構造と裏込に注目し、石室内部構造と複合することで横穴式石室をもつ古墳構造について検討した。

その結果、模様積石室や切石積石室を中心に、基礎構造と裏込とが複合した古墳構造としての分布圏が認められた。この分布圏は古墳築造集団の違いとも考えられる。

小林も述べるように、横穴式石室の動向に基づく画期設定は大枠を捉えたもので、横穴式石室の系譜・系統関係や推移に関しては、古墳群・群集墳単位の変遷を把握する必要がある。そのうえで改めて古墳構造と築造集団の展開について検討することによって、古墳時代における地域の具体像がみえてくるだろう。この点については改めて検討を進めていきたい。

本論は、2009年度に早稲田大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を基礎としている。修士論文の執筆と審査では、主査の岡内三眞先生、副査の菊池徹夫先生および車崎正彦先生から多大なる御指導御鞭撻を賜りました。

更に2010年12月11日に早稲田大学考古学会（於：早稲田大学）で行った研究発表において、多くの方々から発表の席上より数々の有益なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

付記

本論は2010年4月から2011年11月まで助成を受けていた日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号22・5675）研究成果の一部である。

註

- (1) 「敷き固める」か「盛る」かは判然としない事例が多く、墳丘盛土に対して薄く、面的に広がる状況から「敷く」という表現を採用した。
- (2) ここでは棺床面下に位置し、石室内部からみえずに壁体を支持するものを「根石」と呼ぶ。壁体の一段目が根石を兼ねる場合もある。根石には壁体を支持するとともに、横穴式石室の平面プランを規定する役割もあったと考えられる。
- (3) 小林は第1期をMT15-TK10型式期（6世紀初頭ないし前半～中葉頃）、第2期をTK43-TK209型式期（6世紀後半～6世紀末ないし7世紀初頭頃）、第3期をTK217型式期以降（7世紀前半以降）とする。須恵器型式は田辺昭三編年に基づいており、本論でもこれを踏襲する（田辺1981）。
- (4) 若宮八幡古墳は近年、東松山市埋蔵文化財センターにより調査が行われた。調査成果は未報告であり、現状では現地説明会資料でその概要を知ることができる。

引用・参考文献

青木 敬 2004 「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号 pp.61-82 國學院大學古墳時代研究会

- 青木 敬 2005 「後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室－群集墳築造における“畿内と東国”－」『東国史論』第20号 pp.1-35 群馬考古学研究会
- 青木 敬 2007 「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第23号 pp.41-65 日本考古学協会
- 青木 敬 2011 「墳丘構築技術の変遷と展開」『第16回東北関東前方後円墳研究会大会〈もの〉と〈わざ〉』発表要旨資料 pp.29-48 東北・関東前方後円墳研究会
- 青木 弘 2009 「古墳における掘込地業の分析試論－7世紀の武蔵地域を対象に－」『溯航』第27号 pp.1-22 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 青木 弘 2011 「土木考古学による古墳築造技術の分析試論－土質工学調査実施古墳を対象として－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯 pp.79-95 早稲田大学大学院文学研究科
- 青木 弘 2013a (近刊) 「埼玉県の横穴式石室使用石材研究の現状と課題」『金鈴』第25号 早稲田大学考古学研究会
- 青木 弘 2013b (近刊) 「埼玉県内横穴式石室の事例集成」『研究紀要』第27号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 弘 2013c (近刊) 「模様積石室をもつ古墳の築造技術－群馬県伊勢塚古墳を対象に－」『岡内三眞先生古稀記念論集技術と交流の考古学』同成社
- 秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義－榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石」『群馬県立歴史博物館紀要』(21) pp.35-60 群馬県立歴史博物館
- 一瀬和夫 1988 「終末期古墳の墳丘」『網干善教先生華甲記念考古學論集』pp.613-644 網干善教先生華甲記念会
- 岩田明広・細田 勝 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第135集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 筈瀬明宏 1996 「古墳墓壇構築の歴史的意義－筑前地域を中心に－」『福岡大学大学院論集』pp.33-68 福岡大学大学院論集刊行委員会
- 筈瀬明宏 2004 「古墳墓壇構築技術の諸様相－肥前地域を中心に－」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』pp.317-341 小田富士雄先生退職記念事業会
- 梅沢重昭・松本浩一他 1983 『奥原古墳群』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 菊池吉修 2003 「静清地域の横穴式石室の形態」『静岡県の横穴式石室』pp.227-240 静岡県考古学会
- 菊池吉修 2005 「横穴式石室の裏込にみる地域性－駿河の事例－」『研究紀要』第11号 pp.45-58 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 草野潤平 2008 「埼玉県における切石積石室の地域相」『埼玉考古』43 pp.27-46 埼玉考古学会
- 恋河内昭彦 2011 「長沖古墳群Ⅸ－長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査－」本庄市埋蔵文化財調査報告書第24集 本庄市教育委員会
- 小暮岳実 2011 「荒川低地へ向かった後期完新世の利根川旧流路－妻沼低地における旧流路の復元－」『地学雑誌』120 (4) pp.585-598 東京地学協会
- 小林孝秀 2008 「北武蔵における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第44号 pp.4-31 専修大学
- 神保侑史他 1986 「清里・長久保遺跡」昭和55年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木一男 1994 「砂礫裏込の横穴式石室－栃木県南部にみられる石室裏込の一樣相－」『小山市立博物館紀要』第4号 pp.1-38 小山市立博物館
- 鈴木徳雄 2007 「長沖古墳群の形成と共同用益地－児玉郡地域における古墳群の形成(予察)－」『長沖古

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造（青木弘）

- 墳群Ⅶ－久保地区B地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告第14集 pp.23-33 本庄市遺跡調査会
- 外尾常人 1992 「上里町の古墳」『上里町史 資料編』上里町
- 田中広明 1989b 「緑泥片岩を運んだ道－変容する在地首長層と労働差発権－」『土曜考古』第14号 pp.83-112 土曜考古学研究会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 寺前直人 2007 「畿内型横穴式石室の基礎構造」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』pp.335-360 小笠原好彦先生退任記念論集刊行会
- 徳江秀夫編 1998 『綿貫観音山古墳1（墳丘・埴輪編）』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 徳江秀夫編 1999 『綿貫観音山古墳2（石室・遺物編）』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第255集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新山保和 2006 「群馬県における横穴式石室構築法について」『研究紀要』24 pp.53-62 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 土生田純之 1994 「横穴式古墳構築過程の復元」『専修史学』第26号 pp.41-78 専修大学歴史学会
- 土生田純之 2003 「Ⅰ横穴式古墳構築過程の復元」『古墳築造の復元的研究』pp.5-88 雄山閣
- 増田逸朗他 1997 『塚山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告第10集 埼玉県教育委員会
- 松崎元樹 2007 「多摩川流域および周辺における後・終末期古墳群の特性と地域構造」『関東の後期古墳群』考古学リーダー12 pp.103-122 六一書房
- 松本浩一・桜場一寿・右島和夫 1980 「截石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題上－いわゆる朱線をもつ南下E号古墳を中心として－」『群馬県史研究』11号 pp.1-37 群馬県史編さん委員会
- 松本浩一・桜場一寿・右島和夫 1981 「截石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題下－いわゆる朱線をもつ南下E号古墳を中心として－」『群馬県史研究』13号 pp.11-67 群馬県史編さん委員会
- 丸山陽一・中沢良一 1998 『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第16集 美里町教育委員会
- 右島和夫 2003a 「横穴式古墳の構築過程を調査する－群馬県富岡市田篠遺跡1号墳－」『古墳構築の復元的研究』pp.213-254 雄山閣
- 右島和夫 2003b 「巨石巨室横穴式石室の築造背景－群馬県高崎市観音塚古墳の横穴式石室－」『古墳構築の復元的研究』pp.255-290 雄山閣
- 右島和夫 2010 「利根川中流域における6世紀後半の前方後円墳」『阿弥陀古墳』伊勢崎市文化財調査報告書第95集 pp.126-137 伊勢崎市教育委員会
- 森 格也 2002 「横穴式石室の下部構造」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻 pp.307-312 古代吉備研究会
- 森田彦彦・永井智教 1999 『塩古墳群狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集 江南町教育委員会
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 pp.105-119 講談社

報告書出典

紙幅の都合上、付表掲載文献を割愛せざるを得なかった。ご寛恕いただければ幸いである。

図版出典

図1 筆者作成, 図2 筆者作成

図3 以下の文献掲載図版を引用・改変

田村 誠・金子彰男 2012 『青柳古墳群南塚原支群Ⅲ 県営畑地帯総合土地改良事業神川南部地区発掘調査報告書Ⅲ』神川町埋蔵文化財調査報告第5集 神川町教育委員会

田村 誠・金子彰男 1997 「城戸野支群」『青柳古墳群城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群 県営畑地帯総合土地改良事業神川南部地区発掘調査報告書Ⅰ』神川町教育委員会文化財調査報告書第16集 神川町教育委員会

増田他1977, 丸山・中沢1998

小久保徹他 1981 『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告-V-桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岩瀬 譲 1985 『鶴ヶ丘(E区)住宅都市西部公団川越鶴ヶ島地区埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

岡本健一 1997 『將軍山古墳《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》-史跡等活用特別事業-』埼玉県教育委員会

図4 以下の文献掲載図版を引用・改変

田村 誠・金子彰男 2012, 森田・永井 1999

図5 筆者作成, 図6 秋池 2000, 小暮 2011, 埼玉県 1988 『新編埼玉県史』通史編, 元木・国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所 2008 『荒川読本第13版』をもとに筆者作成

図7 筆者作成, 表1 筆者作成, 表2 筆者作成

(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県鴻巣市加美3-2-16-101号 アーバンライフ

—付表 凡例—

【遺跡No.～立地面】	番号は分布図に対応する。 所在地は埼玉県HP掲載の市町村合併(2012年10月1日)に基づく。
【古 墳 名】	複数の名称をもつ事例では古墳群(群集墳)の帰属がわかる名称を優先した。
【墳 形】	前:前方後円墳 円:円墳 方:方墳 八:八角形墳
【墳 長】	周溝が検出されている場合、内径値を墳長とする。 計測箇所によって複数の値が記録されている事例ではその平均を表示。
【埴 輪】	◎:列を検出 ○:出土 ×:出土せず
【基礎構造・掘込形態】	文中での分類名に準拠
【裏 込・裏込素材】	文中での分類名に準拠
【室 数】	玄室を一室と数え、前室を伴う場合は二室、それ以上は三室とする。
【袖 部】	両:両袖、無:無袖、片:片袖(横穴式石室を入口から見て、 左側に袖をもつ事例を左袖、右側に袖をもつ事例を右袖とする。)
【石室石材】	片:片岩系石材 砂:砂岩系石材 自:自然石(河原石含む) 凝:凝灰岩 緑片:緑泥片岩 角安:角閃石安山岩、珪岩、頁岩、房州石
【石材加工】	名称・定義は『群馬県内の横穴式石室Ⅴ』(群馬県古墳時代研究会2004) におおむね準じている。
【そ の 他】	各項目に「？」が付く場合、その可能性が高いことを示す。 不明の場合は、「不明」と記載。

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造（青木弘）

付表 検討事例一覧（見開き）

分布	No.	遺跡名／地形／立地面	古墳名	墳丘			基礎構造	
				墳形	墳長	埴輪	基礎構造	掘込形態
1	1	飯塚・招木古墳群(秩父市) 河岸段丘上／平坦面	飯塚・招木126号墳	円	不明	×	旧地表面直上	U字
2	2	上長瀬古墳群(長瀬町) 河岸段丘上／平坦面・緩斜面	上ノ台1号墳	円	6	×	土敷	なし
	3		上ノ台2号墳	円	13	×	土敷	なし
	4		上ノ台3号墳	円	9	×	土敷	なし
	5		南塚原4号墳	円	23	○	旧地表面直上	なし
3	6	青柳古墳群(神川町) 扇状地段丘上／ 平坦面・緩斜面	南塚原5号墳	円	23	○	旧地表面直上	なし
	7		南塚原6号墳	円	37	○	旧地表面直上？	なし
	8		南塚原7号墳	円	20	×	旧地表面直上？	なし
	9		南塚原10号墳	円	19	○	石敷	なし
	10		南塚原20号墳	円	24	○	旧地表面直上	なし
	11		南塚原25号墳	円	17	×	旧地表面直上	U字 (棺床面周囲)
	12		南塚原26号墳	円	19	○	土敷・石敷	なし
	13		南塚原35号墳	円	19	×	土敷	なし
	14		南塚原38号墳	円	25	○	石敷	なし
	15		南塚原40号墳	円	17	○	石敷	なし
	16		南塚原46号墳	円	19	○	石敷？	なし
	17		南塚原50号墳	円	14	○	石敷？	なし
	18		南塚原54号墳	円	22	○	石敷	なし
	19		南塚原55号墳	円	27	○	石敷	なし
	20		南塚原58号墳	円	18	×	旧地表面直上	U字
	21		南塚原62号墳	円	16	○	石敷	なし
	22		南塚原69号墳	円	17	×	石敷	なし
	23		南塚原70号墳	円	22	×	掘込＋盛土＋石敷	
	24		四軒在家2号墳	円	20	×	石敷	なし
	25		四軒在家3号墳	円	23	×	土敷・石敷	なし
	26		四軒在家6号墳	円	10	×	土敷・石敷	なし
	27		四軒在家7号墳	円	14	×	土敷・石敷	なし
	28		四軒在家8号墳	円	17	×	土敷・石敷	なし
	29		城戸野7号墳	円	14	○	旧地表面直上	U字
	30		城戸野15号墳	円	14	×	石敷	U字
	31		城戸野30号墳	円	20	○	掘込＋土敷＋石敷	なし
	32		海老ヶ久保10号墳	円	16	×	石敷	U字
	33		海老ヶ久保11号墳	円	11	×	地上式	三辺
	34		海老ヶ久保18号墳	円	11	×	石敷	U字
	35		海老ヶ久保20号墳	円	21	×	旧地表面直上	U字＋砂礫
	36		十二ヶ谷戸3号墳	円	18	○	旧地表面直上	なし
	37		十二ヶ谷戸4号墳	円	11	◎	旧地表面直上	なし
	38		十二ヶ谷戸10号墳	円	13	◎	旧地表面直上	なし
	39		十二ヶ谷戸17号墳	円	不明	○	旧地表面直上	U字
	40		二ノ宮14号墳	円	12	×	半地下式	三辺
	41		二ノ宮17号墳	円	15	×	土敷・石敷	なし
	42		二ノ宮19号墳	円	13	×	掘込地業	不明
	43		諏訪ノ木古墳	円	14	◎	旧地表面直上	なし
4	44	大御堂古墳群(上里町) 河岸段丘／平坦面	大御堂稲荷塚古墳	円	23	◎	旧地表面直上	なし
5	45	帯刀古墳群(上里町) 微高地／平坦面	帯刀2号墳	不明	11	×	旧地表面直上？	なし
	46		帯刀4号墳	円	12	×	旧地表面直上？	なし
	47		帯刀20号墳(98号墳)	円	28	○	土敷	なし
	48		原田1号墳	円	20	○	土敷	なし
	49		原田2号墳	円	18	○	土敷	なし
6	50	下郷古墳群(上里町) 微高地／平坦面	寺浦2号墳	円？	不明	○	掘込地業	不明
7	51	旭・小島古墳群(上里町・本庄市) 台地／平坦面	上里5号墳	円？	12	×	掘込地業	不明
	52		小島御手長山古墳	円	42	○	馬蹄形整地	U字
	53		開拓1号墳	円	23	×	掘込地業3'類	三辺
	54		三田11号墳	円	12	×	掘込内	三辺
	55		三田13号墳	円	12	×	掘込地業4'類	三辺
	56		三田14号墳	円	12	×	掘込地業4'類	三辺
8	57	御堂坂古墳群(本庄市) 台地／平坦面	御堂坂1号墳	円	11	○	旧地表面直上？	掘込＋盛土 (石材設置面)
	58		御堂坂2号墳	円	18	×	旧地表面直上	U字
9	59	塚合古墳群(本庄市) 台地／平坦面	本庄41号墳	円	10	○	土敷	なし
10	60	長沖古墳群(本庄市)	長沖3号墳	円	10	×	旧地表面直上	なし
	61	河岸段丘上／平坦面・緩斜面	長沖8号墳	帆	26	○	盛土	なし

裏込		横穴式石室							時期
裏込方法	裏込素材	形態	室数	袖部	石室石材	石材加工	全長	最大幅	
馬蹄形？	砂礫？	胴張形通目積	単	両	片・自	なし	2.32	1.34	第3期後半
馬蹄形(控え積無)	砂礫	胴張形通目積	単	両	片	なし	3.13	1.07	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	片	なし	3.72	1.44	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	片	なし	2.8	1.52	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	両	自	なし	6.12	2.38	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	4.65	2.43	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	無	片・自	なし	8.13	2.27	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.9	1.67	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	両	自	なし	6.9	2.65	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	無	自	割石	7.5	1.45	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	7.5	1.9	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	片・自	なし	6.1	2.1	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両？	自	なし	4.2～	1.81	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	無？	自	なし	4.9～	1.6	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	7.16	2.72	第2期
馬蹄形？	砂礫？	短冊形	単	無	不明	なし	4～	1	第2期
馬蹄形？	砂礫	胴張形	単	両？	凝	切石	不明	1.6	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	6	2.2	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	両	自	なし	6.7	2.2	第2期
馬蹄形？	砂礫	胴張形	単	両	自	なし	不明	1.8	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	5.9	1.55	第2期
馬蹄形(控え積無)	砂礫、土	胴張形模様積	単	両？	片・自	なし	5.8	1.6	第3期前半
馬蹄形(控え積無)	砂礫	胴張形模様積	単	両？	自	なし	6.3	1.85	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	7.9	2.3	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	6.7	1.9	第3期後半
馬蹄形(控え積無)	砂礫	胴張形模様積	単	両？	自	なし	2.7～	1.4	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.3	1.5	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	6.2	1.7	第3期後半
馬蹄形？	砂礫、土	短冊形	単	無	不明	不明	4.5～	不明	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自	なし	6	2.4	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形通目積	単	両	自	なし	7～	2.35	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両？	自	なし	7.05	1.66～	第3期前半
馬蹄形(控え積無)	砂礫、土	胴張形模様積	単	両？	自	なし	4.6～	1.8	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形通目積	単	両	自	なし	4.6～	1.94	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自	なし	7.05～	2.23	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無？	自	なし	1.45～	1.5	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形	単	無	自	なし	4.5	2	不明
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無	片・自	なし	4.85	1.4	第1期後半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	無	片・自	なし	4.08	1.18	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自・緑片	なし	4.89	1.35	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自	なし	6.22	2.1	第3期前半
馬蹄形(控え積無)	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.15	1.4	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形	単	無	自	なし	5.5	1.1	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無	自	なし	5.4	1.01	第2期
馬蹄形(控え積無)	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.05	1.35	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	不明	自？	なし	5.4	2.1	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	両？	自	なし	6.6	2.8	第1期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	不明	自	なし	5.8	2.3	第1期後半
馬蹄形控え積	砂礫	横穴式石室	単	無？	自？	なし	5.4	1.86	第1期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	両	不明	不明	不明	1.5	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形互目積	単	両？	角	削石	6～	不明	第3期前半
馬蹄形(控え積無)	砂礫	胴張形互目積	単？	両？	角	切石	6～	2.85	第2期
土の互層	土	胴張形互目積	単	両	角	削石	5.1	1.4	第3期後半
土の互層	土	小判形通目積	単	両	角・片・自	削石	4.1	1	第3期後半
土の互層	土	小判形	単	両	角・片	削石	4.85	1.3	第3期後半
土の互層	土	小判形	単	両	自・角	削石	4.6～	1.2	第3期後半
馬蹄形(控え積無)	砂礫、土	胴張形互目積	単	両？	角	削石	4.87	1.68	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	不明	角	削石	5～	1.8	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形互目積	単	両？	角	削石	不明	1.9	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	2.75～	1.78	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	両？	緑片・片・自	なし	5.86	不明	第2期

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造（青木弘）

分布	No.	遺跡名／地形／立地面	古墳名	墳丘			基礎構造	
				墳形	墳長	埴輪	基礎構造	掘込形態
10	62	長沖古墳群(本庄市) 河岸段丘上／平坦面・緩斜面	長沖9号墳	円	不明	○？	旧地表面直上	なし
	63		長沖10号墳	円	(12)	×	旧地表面直上	なし
	64		長沖11号墳	円	14	×	旧地表面直上	なし
	65		長沖21号墳	円？	不明	○	旧地表面直上	なし
	66		長沖23号墳	円	不明	○	土敷？	なし
	67		長沖30号墳	円	10	×	旧地表面直上	U字
	68		長沖40号墳	円	14	×	旧地表面直上	U字＋砂礫
11	69		道上1号墳	円	19	○	地上式	三辺
	70	宮内古墳群(本庄市) 山地性丘陵／斜面	宮内1号墳	円	7	×	地上式	三辺
12	71		宮内2号墳	円	7	×	掘込内	三辺？(山寄せ)
	72	塚本山古墳群(美里町) 丘陵／斜面	塚本山1号墳	円	25	○	地上式	三辺
	73		塚本山3号墳	円	13	×	半地下式	三辺
	74		塚本山4号墳	円	11	×	半地下式	三辺
	75		塚本山5号墳	円	19	×	地上式	三辺
	76		塚本山7号墳	円	10	×	地上式	三辺
	77		塚本山8号墳	円？	11	×	地上式	三辺
	78		塚本山9号墳	円？	25	×	地上式	三辺
	79		塚本山10号墳	円	23	×	地上式	三辺
	80		塚本山11号墳	円	18	×	半地下式	不明
	81		塚本山12号墳	方？	22	×	地上式	三辺
	82		塚本山13号墳	円	12	×	半地下式	四辺
	83		塚本山15号墳	円	20	○	地上式	不明
	84		塚本山16号墳	円	10	×	半地下式	三辺
	85		塚本山17号墳	円	11	○？	半地下式	三辺
	86		塚本山18号墳	円	13	×	地上式	三辺？
	87		塚本山19号墳	円	11	×	半地下式	三辺
	88		塚本山20号墳	円	10	×	半地下式	不明
	89		塚本山21号墳	円	7	×	半地下式	三辺？
	90		塚本山22号墳	円	10	×	半地下式	三辺
	91		塚本山24号墳	円	-	×	地上式	三辺
	92		塚本山25号墳	円	-	×	地上式	三辺
	93		塚本山26号墳	円	-	×	地上式	三辺
	94		塚本山27号墳	円	-	×	半地下式	三辺
	95		塚本山28号墳	円	13	×	地上式	三辺
	96		塚本山29号墳	円	10	×	地上式	三辺
	97		塚本山30号墳	円	-	×	半地下式	三辺
	98		塚本山34号墳	不明	-	×	半地下式	なし
13	99	広木大町古墳群(美里町) 河岸段丘／平坦面	広木大町9号墳	前	43	◎	盛土？	不明
	100		広木大町39号墳	円	14	○	盛土？	なし
	101		広木大町46号墳	円	10	○	旧地表面直上？	なし
14	102	白石古墳群(美里町) 丘陵／ 平坦面・緩斜面、 斜面(白石3・6・11・12号墳)	白石3号墳	前	33	○	旧地表面直上	なし
	103		白石4号墳	円	-	○	土敷	なし
	104		白石5号墳第1石室	円	-	○	石敷	なし
	105		白石5号墳第2石室	円	-	○	石敷	なし
	106		白石6号墳	円	14	×	半地下式	三辺
	107		白石11号墳	円	17	○	土敷	なし
	108		白石12号墳	円	17	○	土敷	なし
	109		白石13号墳	円	20	○	土敷	なし
	110		白石14号墳	円	30	○	土敷	なし
	111		白石18号墳	円	17	○	土敷	なし
	112		後海道2号墳	円	18	○	土敷	なし
	113		後海道3号墳	円	20	×	掘込地業4'類	三辺？
	114		後海道4号墳	円	20	×	土敷	なし
	115		後海道5号墳	円	-	○？	土敷	なし
	116		久保1号墳	円	26	○	旧地表面直上	なし
	117		久保2号墳	円	23	○	土敷	なし
15	118		久保3号墳	円	-	○	旧地表面直上	なし
	119		久保4号墳	方？	23	○	旧地表面直上	なし
	120		久保5号墳	円	13	×	旧地表面直上	なし
	121		早道場3号墳	円	16	○	土敷	なし
	122		早道場4号墳	円	17	○	土敷？	なし
	123	羽黒山古墳群(美里町) 丘陵／斜面	羽黒山1号墳	円	-	×	旧地表面直上	なし
	124		羽黒山3号墳	円	18	×	土敷	なし
	125		羽黒山6号墳	円	15	×	土敷	なし
	126	諏訪林古墳(美里町) 丘陵／緩斜面	諏訪林古墳	円	24	×	土敷	なし
17	127	猪俣北古墳群(美里町) 丘陵／緩斜面	猪俣北1号墳	円	20	×	土敷	なし
	128		猪俣北2号墳	円	19	×	土敷	なし

裏込		横穴式石室							時期
裏込方法	裏込素材	形態	室数	袖部	石室石材	石材加工	全長	最大幅	
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.34	1.51	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	3.6	1.37	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.85～	1.8	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片・自	なし	8.16	2.68	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	両	緑片・片・自	なし	5.7	1.6	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.15～	2.5	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	不明	1.94	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	不明	不明	不明	不明	不明	第2期
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両	片	なし	5.67	1.42	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両	片	なし	3.8～	1.2	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.63	2.77	第2期
土の互層	土、砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.8	1.44	第3期後半
土の互層	土、砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.09	1.44	第3期後半
土の互層	土、砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.09	1.56	第3期前半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.6	1.66	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.72	1.43	第3期前半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.12	1.55	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.4	1.1	第3期後半
土の互層	土、砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.15	1.63	第3期後半
馬蹄形(控え積無)	土、砂礫	胴張形模様積	単	両	片	なし	6.7	1.1	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.5	1.75	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両?	片	なし	5.75	1.95～	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.32	1.59	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.82	1.8	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.03	1.4	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.65	1.71	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	不明	片	なし	不明	1.71	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.9	1.4	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.28	1.4	第3期前半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.92	1.12	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.39	1.21	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.42	1.57	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	5.06	1.17	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	4.38	1.3	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.6	1.2	第3期後半
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	片	なし	3.9	1.32	第3期前半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	無	片	なし	1.88	0.55	不明
馬蹄形控え積	砂礫?	短冊形	単	無	自	なし	6.9	1.7	第1期後半
馬蹄形?	砂礫?	短冊形通目積	単	無	自	なし	不明	1	不明
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両?	自	なし	不明	1.25	不明
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形	単	無?	自	なし	不明	不明	第1期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形	単	両	自	なし	5.75	2.45	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片・自	なし	5.3	2.75	第2期
不明	不明	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.75	1.65	第2期
土の互層	土	胴張形模様積	単	両	自	なし	3.31～	1.52	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無	自	なし	6.1	1.65	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	横穴式石室	単	不明	自	なし	5.5～	0.9～	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	乱石積	単	無?	自	なし	5～	1.7	第2期
馬蹄形?	砂礫	胴張形乱石積	単	不明	自	なし	4.8～	2.3	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片・自	なし	6.2	2.05	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	片・自	なし	5.45	2.05	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	凝・自	削石	5～	1.75	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	5.85	1.53	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	奥搾形模様積	単	無	自	なし	5.05	1.38	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	無	自	なし	7.62～	2.37	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無	自	なし	5.85	1.7	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	撥形模様積	単	両・左片	自	なし	3.85	1.42	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.12	2.15	第2期
土の互層?	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	不明	不明	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	横穴式石室	単	不明	自?	不明	5.55～	3.65	第2期
馬蹄形?	砂礫?	横穴式石室	単	不明	凝・自	不明	不明	不明	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	撥形模様積	単	無?	片	なし	4.8	1.55	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両?	自	なし	不明	不明	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両?	自	なし	不明	不明	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	凝・自	削石	5.95	2.63	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	凝・自	削石	6.58	1.79	第2期
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	自?	なし	5.68	1.57	第3期前半

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造（青木弘）

分布	No.	遺跡名／地形／立地面	古墳名	墳丘			基礎構造		
				墳形	墳長	埴輪	基礎構造	掘込形態	
17	129	猪俣北古墳群(美里町)	猪俣北12号墳	円	20	×	土敷	なし	
	130		猪俣北13号墳	円	-	×	掘込地業4類	四辺	
18	131	猪俣南古墳群(美里町) 丘陵／斜面	猪俣南1号墳	円	20	○	土敷	なし	
	132		猪俣南2号墳	円	20	○	土敷	なし	
	133		猪俣南15号墳	円	19	不明	掘込地業	不明	
	134		猪俣南18号墳	円	15	×	土敷	なし	
	135		猪俣南19号墳	円	22	×	土敷	なし	
19	136	黒田古墳群(深谷市) 河岸段丘／平坦面	黒田17号墳	円	21	◎	旧地表面直上	なし	
20	137	鹿島古墳群(深谷市) 河岸段丘／平坦面	鹿島1号墳	円	16	×	地上式？	三辺？	
	138		鹿島11号墳	円	-	×	旧地表面直上	なし	
	139		鹿島12号墳	円	24	×	旧地表面直上？	なし	
	140		鹿島13号墳	円	-	×	旧地表面直上？	なし	
	141		鹿島24号墳	円	22	×	旧地表面直上？	不明	
	142		鹿島73号墳	方	9	×	地上式	三辺？	
	143		鹿島81号墳	円	10	×	旧地表面直上？	なし	
21	144	小前田古墳群(深谷市・寄居町) 河岸段丘／平坦面、 斜面(小前田4号墳)	中小前田Ⅱ小前田1号墳	円	13	○	旧地表面直上？	不明	
	145		中小前田7号墳	前	28	○	盛土？	不明	
	146		小前田4号墳(東大12号墳)	円	15	×	地上式	三辺？	
	147		小前田9号墳(東大22号墳)	円	17	○	盛土？	なし	
	148		小前田10号墳(東大31号墳)	円	18	◎	旧地表面直上	なし	
	149		樋ノ下5号墳	円	9	×	掘込地業4'類	三辺	
	150		樋ノ下6号墳	円	10	×	掘込地業4'類	三辺？	
22	151	樋ノ下古墳群(寄居町) 旧自然堤防上微高地／平坦面	樋ノ下8号墳	円	10	×	掘込地業4'類	三辺	
	152		樋ノ下11号墳	円	7	×	掘込地業4'類	三辺	
	153		樋ノ下12号墳	円	17	×	掘込地業4類	四辺	
	154		樋ノ下15号墳	円	10	×	掘込地業	不明	
	155		樋ノ下16号墳	円	11	×	掘込地業4'類	三辺？	
	156		樋ノ下17号墳	円	7	×	掘込地業4類	四辺	
	157		樋ノ下18号墳	円	11	×	掘込地業4類	四辺	
	23		158	三ヶ尻古墳群(熊谷市) 河岸段丘／平坦面	三ヶ尻林4号墳	円	17	○	土敷
159		三ヶ尻林5号墳	円		25	○？	旧地表面直上	なし	
160		三ヶ尻林7号墳	円		不明	○？	旧地表面直上	なし	
24	161	龍原裏古墳群(熊谷市) 台地／平坦面・緩斜面	龍原裏1号墳	八？	13	×	旧地表面直上	なし	
	162		龍原裏2号墳	円	8	×	旧地表面直上	なし	
	163		龍原裏3号墳	円	10	×	地上式	三辺	
	164		龍原裏4号墳	円	8	×	土敷	なし	
	165		龍原裏7号墳	円	8	×	土敷？	なし	
	166		龍原裏8号墳	円	13	×	地上式	三辺	
25	167	石原古墳群(熊谷市) 自然堤防／平坦面	石原2号墳	円	13	○	掘込内	不明	
26	168	玉井古墳群(熊谷市) 自然堤防／平坦面	新ヶ谷戸1号墳	円	15	○	旧地表面直上？	羨道・前庭部に有	
27	169	中条古墳群(熊谷市) 自然堤防／平坦面	中条大塚古墳	円	壇59	円	×	盛土	なし
28	170	飯塚古墳群(熊谷市) 自然堤防上微高地／平坦面	飯塚4号墳	円	12	×	盛土	なし	
	171		飯塚10号墳	円	15	○？	盛土？	なし	
29	172	万吉下原古墳群(熊谷市) 台地／斜面	万吉下原5号墳	円	19	×	地上式	三辺	
30	173	瀬戸山古墳群(熊谷市) 台地／緩斜面	薬師寺1号墳	円	21～	×	地上式	三辺？	
	174		薬師寺3号墳	円	10	×	地上式	三辺	
31	175	塩・古里古墳群(熊谷市) 丘陵／緩斜面	狸塚27号墳	円	20	×	地上式	三辺	
	176		西原11号墳	円	15	不明	掘込内	不明	
32	177	立野古墳群(熊谷市) 台地／平坦面	立野1号墳	円	23	×	地上式	三辺	
	178		立野3号墳	円	11	×	半地下式	三辺	
	179		立野12号墳	円	22	×	掘込地業	三辺	
	180		立野15号墳	円	9	×	旧地表面直上	U字 (構築面周囲)	
	181		立野16号墳	円	7	×	地上式	三辺	
	182		立野17号墳	円	17	×	地上式	三辺	
33	183	東山遺跡(熊谷市)台地／平坦面	東山2号墳	円	9	×	地上式	四辺	
34	184	阿諏訪野東遺跡(熊谷市) 台地／緩斜面・斜面	阿諏訪野1号墳	円	22	×	地上式	三辺	
	185		阿諏訪野2号墳	円	9	×	地上式	三辺	
35	186	古里古墳群(嵐山町)丘陵／緩斜面	北田2号墳	円	14	×	旧地表面直上	なし	
36	187	行司免古墳群(嵐山町) 河岸段丘／平坦面	行司免2号墳	円	17	×	地上式	四辺	

裏込		横穴式石室							時期
裏込方法	裏込素材	形態	室数	袖部	石室石材	石材加工	全長	最大幅	
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	不明	なし	3.9～	1.81	第2期
土の互層	土	胴張形	単	両	不明	なし	3.92～	1.72	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	羽子板形乱石積	単	両	自?	なし	5.3	1.9	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	両	自	なし	5.55	2.02	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.76	2.56	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.33	2.4	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	5.1～	2.5	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	両	自	なし	5.24	2	第2期
土の互層?	土	胴張形模様積	単	両	片・砂	なし	5.13	1.47	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	不明	片・砂	なし	2.8～	1.65	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土?	胴張形模様積	単	両	片・砂	なし	6.65	1.65	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形模様積	単	両	砂・自	なし	5	1.35	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形乱石積	単	両	片・砂	なし	7.65	2.15	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形模様積	単	両	自	なし	4.5	1.4	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両?	自	不明	不明	不明	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形通目積	単	両	自	なし	7.2	3	第2期
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形通目積	単	両	自	なし	6.1	2	第2期
馬蹄形(控え積無)	砂礫、土	胴張形	単	両?	片・自	なし	不明	1.7	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形通目積	単	無	片・自	なし	5.8～	0.9	第1期前半
馬蹄形控え積	砂礫	短冊形乱石積	単	無	片・自	なし	5.9	1.2	第2期
土の互層	土	胴張形	単	両	片・砂	なし	不明	1.13	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両	片・砂・緑片	なし	不明	1.46	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両?	片・砂・緑片	なし	4.5	1.24	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両	片・砂・緑片	なし	2.9～	0.78～	第3期後半
土の互層	土	横穴式石室	単	不明	片・砂	なし	不明	不明	第3期前半
土の互層?	土	胴張形	単	両?	片・砂	なし	不明	1.51	第3期後半
土の互層?	土	胴張形	単	不明	片・砂	なし	不明	1.56	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両	片・砂	なし	2.62	0.86	第3期後半
土の互層?	土	胴張形	単	両?	片・砂	なし	3.72～	1.17	第3期後半
馬蹄形控え積	砂礫	胴張形乱石積	単	両	自	なし	5.85	1.95	第2期
馬蹄形?	砂礫	胴張形	単	不明	自	なし	不明	不明	第3期前半
馬蹄形?	砂礫	胴張形	単	不明	不明	不明	不明	不明	第2期
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	4.9	1.9	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	不明	自	なし	不明	不明	第3期前半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	3.7	1.3	第3期後半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	片・自	なし	3.3	1.1	第3期前半
土の互層	土	胴張形	単?	不明	自	なし	不明	不明	第3期後半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	4.4	1.7	第3期後半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	6.2	1.7	第2期
土の互層	土、砂礫	胴張形通目積	単	両	片・片	なし	5.44	1.49	第2期
土の互層?	土、石屑	胴張形互目積	二	両	角・緑片・片	切組	9.6	3.4	第3期前半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両?	角	削石	3.97～	1.2	第3期前半
土の互層	土	胴張形互目積	単	不明	角	削石	不明	1.47	第3期前半
土の互層	不明	胴張形乱石積	単	両	自	なし	3.98	1.9	第2期
土の互層	土	胴張形切石積	二?	両	凝・緑片	切組	3.3～	3.15	第3期前半
土の互層	土	短冊形通目積	二?	両	凝	切石	1.65～	1.2	第3期前半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	単	両	凝	切組	5.28	1.83	第3期前半
土の互層	土	切石積	単?	不明	凝	切石	2～	不明	第3期前半
土の互層	土	短冊形切石積	単	両	凝	切組	4.55～	1.67	第3期前半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切組	3.32	1.32	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切石	不明	不明	第3期後半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	自	なし	3.52	1.5	第3期前半
土の互層	土	胴張形	単	両	凝	なし	2.71	0.62	第3期前半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切組	2.14	0.77	第3期後半
土の互層	土	短冊形切石積	単	両?	凝	切石	2.17～	0.97	第3期前半
土の互層	土	胴張形切石積	単	不明	凝	切石	不明	1.7	第3期後半
土の互層	土、石屑	短冊形切石積	単	不明	凝	切石	2.23～	1.21	第3期後半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	単	両	凝	切組	5.37	2.57	第3期前半
馬蹄形控え積	砂礫、土	胴張形通目積	単?	両	自	なし	3.3	1.4	第3期前半

横穴式石室の基礎構造と裏込にみる古墳築造（青木弘）

分布	No.	遺跡名／地形／立地面	古墳名	墳丘			基礎構造	
				墳形	墳長	埴輪	基礎構造	掘込形態
37	188	月輪古墳群(嵐山町・滑川町) 台地／平坦面	屋田5号墳(月輪13号墳)	円	19	◎	旧地表面直上	U字
	189		月輪6号墳	円	14	×	旧地表面直上	U字
38	190	西原古墳群(東松山市) 台地／緩斜面	西原1号墳	円?	11	×	掘込地業	不明
	191		西原3号墳	円	11	×	掘込地業	不明
39	192	三千塚古墳群(東松山市) 丘陵／平坦面	第Ⅰ支群三千塚207号墳	円	30	×	旧地表面直上?	不明
	193		第Ⅰ支群三千塚260号墳	円	26	×	旧地表面直上?	不明
	194		第Ⅲ支群三千塚3号墳	円	25	×	掘込内?	不明
	195		第Ⅲ支群三千塚4号墳	円	22	×	掘込内	三辺(山寄せ)
	196		第Ⅲ支群三千塚13号墳	円	15	×	掘込内	三辺(山寄せ)
	197		第Ⅲ支群三千塚16号墳	円	19	×	掘込内	三辺(山寄せ)
	198		第Ⅷ支群三千塚3号墳	円	30	◎	盛土?	なし
40	199	田木山古墳群(東松山市) 台地／斜面	田木山1号墳	円	13	×	旧地表面直上	なし
	200		田木山2号墳	円	18	×	地上式	三辺
41	201	駒堀古墳群(東松山市)台地／斜面	駒堀2号墳	不明	不明	×	地上式	三辺
42	202	根平古墳群(東松山市) 丘陵／緩斜面	根平1号墳	円	10	×	地上式	三辺
	203		根平2号墳	円	19	×	地上式	三辺
43	204	桜山古墳群(東松山市) 台地／平坦面・緩斜面、 斜面(桜山13号墳)	桜山1号墳	円	12	×	掘込地業4'類	三辺
	205		桜山2号墳	円	7	×	地上式	四辺
	206		桜山3号墳	円	7	×	掘込地業4'類	不明
	207		桜山6号墳	円	11	×	掘込地業4'類	三辺
	208		桜山7号墳	円	10	×	掘込地業4'類	三辺
	209		桜山8号墳	円	10	×	掘込地業4'類	四辺
	210		桜山9号墳	円	7	×	掘込地業4'類	三辺
	211		桜山10号墳	円	14	×	掘込地業4'類	四辺
	212		桜山11号墳	円	11	×	掘込地業4'類	四辺
	213		桜山12号墳	円	11	×	掘込地業4'類	三辺
	214		桜山13号墳	円	不明	×	掘込地業4'類	四辺
44	215	下唐子古墳群(東松山市) 台地／平坦面・緩斜面	若宮八幡古墳	円	30	○	土敷?	なし
45	216	野本古墳群(東松山市) 台地／平坦面	久保原古墳	円	32	×	掘込地業	三辺
	217		上川入古墳	円	22	×	半地下式	不明
46	218	諏訪山古墳群(東松山市) 台地／平坦面	諏訪山3号墳	不明	不明	不明	盛土?	なし
	219		諏訪山4号墳	円	13	○	盛土?	なし
	220		諏訪山6号墳	円	13	○	盛土?	なし
47	221	高坂古墳群(東松山市) 台地／平坦面	高坂15号墳	不明	不明	×	掘込内	三辺
	222		高坂16号墳	不明	不明	×	掘込内	三辺
48	223	入西古墳群(坂戸市) 台地／平坦面	大河原2号墳	円	17	×	地上式	不明
	224		北峯7号墳	円	13	不明	盛土?	なし
49	225	西戸古墳群(毛呂山町) 河岸段丘／平坦面	西戸2号墳	円	13	×	旧地表面直上	なし
	226		西戸8号墳	円?	8.5～	不明	掘込内	不明
	227		西戸13号墳	円	10	×	地上式	四辺?
50	228	鶴ヶ丘古墳群(鶴ヶ島市) 台地／平坦面	鶴ヶ丘稲荷神社古墳	方	43	×	掘込地業3類	四辺
	229		鶴ヶ丘1号墳	方	27	×	掘込地業2類	四辺
51	230	的場古墳群(川越市) 台地／平坦面	牛塚古墳第1次玄室	前	47	×	土敷	なし
	231		牛塚古墳第2次玄室	前	47	×	土敷	なし
52	232	南大塚古墳群(川越市)台地／平坦面	南大塚4号墳	帆	36	○	半地下式	三辺
53	233	海谷古墳群(所沢市) 台地／平坦面	海谷1号墳	円	26	×	旧地表面直上	U字
	234		海谷2号墳	円	24	×	地上式	三辺
54	235	埼玉古墳群(行田市) 埋没ローム／平坦面	将軍山古墳	前	90	○	盛土	U字
55	236	若小玉古墳群(行田市) 後背湿地／平坦面	八幡山古墳	円	74	×	盛土	なし
56	237	閤戸古墳群(蓮田市) 台地／緩斜面	十三塚古墳	円	22	×	地上式	三辺
57	238	笹原古墳群(蓮田市) 台地／緩斜面	ささら3号墳	円	-	×	地上式	三辺?
58	239	諏訪山南遺跡(北本市)台地／平坦面	諏訪山南1号墳	円	20	×	地上式	三辺
59	240	川田谷古墳群(桶川市) 台地／平坦面	西台7号墳	円	30	不明	半地下式?	不明
	241		城髪山1号墳	不明	-	×	地上式	不明
	242		城髪山2号墳	不明	-	×	半地下式	不明
60	243	側ヶ谷戸古墳群(さいたま市) 台地／突端	台耕地稲荷塚古墳	円	30	×	盛土	なし
61	244	植水古墳群(さいたま市) 台地／平坦面・緩斜面	植水4号墳	円	18	×	掘込地業4類	四辺

裏込		横穴式石室							時期
裏込方法	裏込素材	形態	室数	袖部	石室石材	石材加工	全長	最大幅	
土の互層	土、砂礫	短冊形切石積	単	無	凝	割石	5.54	1.64	第2期
土の互層	土	短冊形通目積	単	無	凝	切石	5.4	1.3	第3期前半
土の互層	土	胴張形通目積	二？	両	緑片・片・自	なし	9	4.2	第3期後半
土の互層	土	胴張形通目積	単	両	緑片・片・自	なし	5.1	1.85	第3期後半
土の互層	土？	胴張形切石積	二	両	凝	切組	5	1.8	第3期前半
土の互層	土？	胴張形切石積	単	両？	凝	切組	3.8	1.8	第3期前半
土の互層	土？	胴張形切石積	単	両	泥岩？	切組	5～	2.8	第3期後半
土の互層	土？	短冊形切石積	単	片	泥岩？	切石	不明	不明	第3期前半
土の互層	土	胴張形切石積	単	不明	泥岩？	切石	不明	1.2	第3期前半
土の互層	土？	胴張形切石積	単	片(左)	泥岩？	切石？	3～	不明	第3期前半
土の互層	土？	短冊形切石積	単	無	泥岩？	切石	不明	不明	第2期
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	二	両	凝	切組	4.83	1.24	第3期後半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	二	両	凝	切組	7.2	2.6	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単	両	自	なし	4.3	1.54	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両	自	なし	2.97	1.15	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	二	両	凝・自	切組	5.05～	1.77	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切組	4.13	1.67	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両	片・自	なし	*3.70	1.1	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両？	凝・緑片・自	切組	4.15	1.56	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両？	自	なし	*4	1.1	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切組	不明	1.29	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両？	凝・緑片・自	楣石が切石	*4.40	不明	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両？	片・自	なし	*4.9	1.02	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両？	自	なし	4～	1.26	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両？	自	楣石が切石	不明	*1.4	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両？	凝	切組	不明	1.56	第3期後半
土の互層	土	胴張形乱石積	単	両	自	楣石が切石	3.8	1.2	第3期後半
土の互層？	土	胴張形切石積	二	両	凝	切組	8.7	2.9	第2期前半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	単	不明	凝	切石	4.5～5.5	2.2	第3期後半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	単	両？	凝	切組	3～	2.07	第3期後半
土の互層？	土？	短冊形切石積	単	片(左)	凝	切組	3.95	2.2	第2期
土の互層	土	羽子板形切石積	単	無	凝	切組	4.7	1.75	第2期
土の互層	土	切石積	単	不明	凝	切石	不明	1.3	第2期
土の互層	土、石屑	羽子板形切石積	単	両	凝	切石	3.23	1.07	第3期後半
土の互層	土	羽子板形切石積	単	両	凝	切石	3.3	1.02	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	二	両	凝	切組	3～	1.7	第3期後半
土の互層	土	胴張形	単？	両	自	なし	2.3～	2.5	不明
土の互層	土、砂礫	胴張形切石積	二	両	凝	切石	2.15～	1.53	第3期前半
土の互層	土	胴張形	単	不明	頁岩	不明	不明	2.3	第3期後半
馬蹄形？	砂礫	胴張形通目積	単	不明	自	なし	2.4～	1.1	第3期前半
土の互層	土	短冊形切石積	二	両	凝	切組	6.03	2.4	第3期後半
土の互層	土	通目積	単	不明	自	なし	4～	1.5	第3期後半
土の互層	土、砂礫	胴張形通目積	単	片？	自	なし	7.6	2.4	第2期後半
土の互層？	土	短冊形	単	片？	不明	なし	不明	不明	第2期後半
馬蹄形控え積	砂礫、土	短冊形	単	両？	自	なし	5.6～	2.2	第2期
土の互層	土	横穴式石室	単	不明	自	なし	6.63	2.17	第3期前半
土の互層	土、砂礫	横穴式石室	単	無？	自	なし	6.5	2.2	第3期前半
不明	不明	短冊形	単	片(左)	房州石	割石？	不明	2	第2期前半
土の互層	土	胴張形切石積	三	両	凝・緑片・角	切組	16.7	4.8	第3期前半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	二	両	凝	切組	5.2	2.1	第3期後半
土の互層	土	短冊形切石積	単	両？	不明	切石	不明	1.76	第3期前半
土の互層	土、石屑	胴張形切石積	単	不明	凝・緑片	切石	5.2	1.4	第3期前半
土の互層	土、石屑	方形切石積	二？	両	凝	切組	3.9	1.85	第3期前半
土の互層？	土？	胴張形切石積	二	両	凝	切石	4.65	1.92	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	二	両	凝	切組	4.2	1.53	第3期後半
土の互層	土	胴張形切石積	単	両	凝	切組	4.4	1.5	第3期前半
土の互層	土	切石積	単	不明	凝	切石	不明	不明	第3期前半